山とスキー

第二十六號

札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年五月一日發行

大正十年六月七日第三種郵便物認可
大正十二年四月三十日印刷納本

第二十六號目次

記事

故板倉勝宣君登山履歴　横有恒　（二二四）
板倉勝宣君の死　（二二六）
板倉君の死と私の懺悔　六鹿一彦　（二五一）
私が板倉君より享けたるものは　大嶋高吉　（二五六）
板倉君の印象　中野誠一　（二五九）
山と死と　加納一郎　（二六一）
山に關する文獻　（二六五）

圖版

地圖　（二二二）
在りし日の板倉勝宣君　（二四二）
立山頂上より見たる室堂附近一帶の高原　（二四五）
松尾峠頂上より見たる天狗平の森林　（二四八）
松尾峠頂上より大日早乙女の連山を見る　（二五〇）
山に於ける板倉君（霞澤、燧岳頂上、日光菅沼）　（二五三）

大正十二年五月發行

在りし日の板倉勝宣君

（一誠野中）

板倉勝宣君逝きて百日、今日君が追悼號出されんとす。

君本會の創立せらるるや最も力を之に盡され、寄稿せられし事又一再ならざりき。君賣名を嫌惡し謙讓、從つて文獻又多からざるも一たび筆を起すや何れも必讀の文字なりき。先に本誌に掲載せる「春の槍から歸つて」「登山法につきての希望」「雪の信飛連山ミスキー」等は讀者の知悉せらるゝ處ならん。札幌を去られ東京にありても常に本會の爲に盡されスキー、登山用具、新刊書籍の購入何れも君を煩はしたる處なり。又昨秋槇有恒氏の北海道に來られ講演會の開催されしも君の盡瘁に依る處にして本會の今日ある君に負ふ事頗る多し。君積雪の立山に逝き今や還へらず。本邦山岳界の憾みとする處なり。

資性寡默、虛飾を好まずその平常より推惟すれば追悼號の出版は君の意に反する處ならんかされど、生前を知るもの追想感慨に堪えざる處なり。本誌の發行は君が追悼の意と合せて遭難の詳報とを披瀝し君ありし日のよすがを辿らんとするの微意に外ならず。

故板倉勝宣君登山履歷

明治四十四年七月　日光白根。

四十五年　不明

大正二年四月　富士裾野廻り（單獨）

夏　上高地、燒ケ岳。

三年七月　上高地、燒ケ岳、穗高、鎗、（暴風雨の爲途中迄）。

四年七月　上高地、穗高。

十二月末より五年一月初旬まで赤倉にてスキー練習。（スキー練習の始め）

五年七月　大町——針ノ木——立山（劍は暴風にて中止）

——立山温泉——芦峅寺。

十二月　關にてスキー練習。

六年七月　上高地、奥穗高、乘鞍。

十二月　五色温泉にてスキー練習。

七年七月—八月　上高地、霞澤、燒、前穗高。

十二月　（五色にてスキー鉢盛山、高倉山等）

八年三月　牧——常念——中山峠——鎗澤、（鎗澤の小屋より天氣不良の爲め引返へす）——上高地——德本峠——松本（板倉君最初のスキーにてアルプス入り）

七月　中房——燕——中房——東澤——濁——烏帽子——双六——笠ケ岳——上高地、前穗高、霞澤。

九月北海道に渉る。

十月十七日を中心に五日間　喜茂別

同　下旬　五劍山。

十二月二十五日——卅一日青山温泉（スキー）

九年一月　合宿終了後　イワヲヌプリ——ヴァイスホルン——小澤——毛無——奥手稻。

一月十八日　奥手稻（ハルカ山を廻る）

二月一日　手稻山。

二月六日より十一日迄　倶知安――脇方――黒橋――中山峠――喜茂別――定山溪。
二月廿九日　奥手稲。
三月中旬　樺太（約一週間）
七月　ビホロ――マシュ湖――クツシヤロ湖――雌阿寒――釧路。新冠。
十月五日　三段山。
卅日　手稲山（キヤンピング）
十二月廿五日より　青山温泉（スキー合宿）
イワヲヌプリ。

大正十年一月三、四日　昆布岳（リーダー）
七、八、九日　ムイネシリ。
十七日　奥手稲。
二十三日　手稲山。
二月六日　手稲山。
九――十一日　余市岳。
十八――二十日　奥手稲。
二十七日　三段山。
四月　牧――常念――中山峠――鎗澤――槍（槍の穂の半分）――上高地――松本。
五月十四、十五日　錢函（一泊旅行）
六月九日　輕川――星置川を逆り――發寒川を下り琴似へ。
六月十八、十九日　札幌岳
六月下旬　中山峠。
九月　日光。鬼怒沼。
十二月十七日　手稲山。
十二月十八日――一月二日　青山温泉合宿
ニセコアン　チセヌプリ

大正十一年一月五日――十日
ヌタツクカムシコペ（九日旭岳を極む）
一月二十一日――二十二日――サホロ岳。
二月八日――十日　奥手稲。
二月二十九日　毛無山。
三月二十三日――二十四日　芦別岳。
三月二十六日――四月一日
ヌタツクカムシュペ。
七月上旬　槍、北屋根初登攀、西穂高――奥穂高へ初縱走、霞澤、燧岳、日光白根。
八月　穂高（空澤の岩小屋に泊り岩登りの練習）
十一月　京都　愛宕山。
十二年一月　立山。

板倉勝宣君の死

槇　有　恒

準　備

夏の山から冬の山へと向ふ傾向は當然な行方である。特に種々な點からして我國での夏の登山は行詰りになつて來てゐる。只夏の登山で之れから開拓せられて行くのは岩登り Rock-climbing, Klettern. の方面ではあるまいか。

若しも我等にして先人の跡をのみ辿ることに滿足が出來て自分の新らしい天地を仰がぬものなら問題はない。然し極く眞面目な意味で、在來と云ふ停滯から少しでも上に延びたいと云ふ望みがあるならば何時も新らしい天地の開拓に我等の試は向ふ。勿論其努力には或は不幸にして世間的な反響とか其他の不純な色彩が加味せられることがあつたとしても夫れすらも許容せらるべきものではあるまいか。只如何なる種類の仕事とて其眞劍に爲す限り夫れは純然たる行であつて意味の深いものと思ふ。而して今更茲に贅言を弄する要もないが、此度の行に就いて或は世間一種の誤解と疑を懷かるゝ人々あるに依つて私等登山黨のために卑見を述べてをきたく思ふ。或は登山の行其ものをヤングハスバンドが云つてゐるやうに藝術として見ることも出來やう。或はスポートに現はれた國民の若い精神の發現とも見ることも出來やう。ともあれ爲さでは止むこゝの出來ない魂の活動であつて假令其結果が毀譽褒貶何れに終らうともそんな事は末事である。私等の期する處は何時も乾坤一擲の努力なのである。そして其處に興味も渾然として融合してゐる。

大きな自然の中に自分を見たいのだ。而も其の超越を自己の心身の鍛錬に依つて克ち得やうとするのだ。であるか

ら若し玆に單に登山は危險であるからとて夫れを抑止しやうとするならば何時迄も君子危きに近寄らずの桃源郷に千年の夢を見つゝ朽ち果つるがよい。死生の巷を往來するとか、ニイチエのやうに危險のみが偉大を齎らすと云ふことを取次で高唱しやうとするのではないが少くとも私等は何事に就ても頗る神經衰弱的な、直ぐに恐怖や打算にのみに依らうとする或る時代病に注意しても可いではないか。もつと精神本來の晴朗な健康さを自重して行くのに心すべきではあるまいか。聊か暴言で恐縮であるが此度は各方面から登山其ものに就いて强壓的消極的の御教訓を得たことに對し一言辨解をなして私等の立場を明かにしたいと思ふ。

話は逸れたが一度登山の經驗を持つ者はおそらく生涯を通じて――假令事情の爲めに實行し得ぬ樣になつても――山黨である。況はんや大地を破つて萠ゑ出でんとする青春の力あるものに於てをやである。而も私は無謀の計を云々するのではない。苟もせざる注意の肝要な位は勿論である。

私等の此度の立山行は破れた。そして尊い友人の死を前にして生き殘つたと云ふことは如何ともし難いとは云ひ乍ら心苦しい。私は此の行の責任者として其登山前後の準備考慮を記し尙遭難の記事は最も注意を以て赤裸々に諸彦の前に披瀝して高見に供したいと思ふ。又、今迄諸方面に既に業に幾多の記事が現はれてをるのであるが私自ら筆を執り且つ責を負ふべきは此文に於て始めてゞあることを附言致したい。

アルペンに於ても冬季登山――此冬季と云ふ文字の中には晩秋新雪積りて陽春五月の候再び冬の特色を失ふに至る期間を示す――は未だ若い。而してアルペンに於ての冬季登山は其山岳が四季を通じて殆ど均しい狀態を保つことよりして比較的入り易い。然し我國での冬の登山は山岳の狀態夏と冬と全く異なるに依て夏の登山の經驗と準備とを以てしては極めて不充分なるを免れない。私は冬の登山に際して極めて概略的で玆に詳說するの機を得ないが次の諸點に注意することが少くとも必要と思ふ。

一、夏季登山の充分の經驗を持つこと、出來るなら冬登らんとする山を夏の間に研究してをくこと、之等は我國でのスキー及び登山用地圖の不完全、小屋場の不備等より及び緩急に際して、精神的に餘裕を持して行くに最も必要である。且つ冬は各自負擔の荷の量が多き故夫れに對しても夏の間に慣れてをくべきである。

二、スキーのテクニツク及びスキー其ものゝ式樣の適否、應急修理等の智識を有すること。

三、防寒具及食飲料の研究と準備、冬の山にては日程の嚴格なる履行が難い故に如何なる場合も豫備的食料の携帶を要する。

四、雪の知識。

五、雪崩の知識。

六、一行者の經驗健康等の可成的平均。

七、同伴人夫の資格。最も注意すべきは行程の指導を全然人夫に依賴するか或は己れが主たるかの點。我國にて全く依賴して可なる案內者少からん。如何なる時にても最後の斷定は自分がなすべき自信を要す。又地方的天候の特質は人夫中に獵をなす者あらば詳しきことあり。

以上の外に夏季登山に要する諸準備の殆ど必要なるは云ふまでもない。

次ぎに同行者並びに案內荷負衆と携帶品を列記すべし。

一　行

一行の冬季登山の經驗の範圍

板倉勝宣　山とスキーに關して經驗知識の豐富なる贅言を要せず特に北海道及燕。槍方面の冬、春兩季登山の經驗を有す。

三田幸夫　又然り。特に昨年三月立山劍岳等に登山したる外に、冬季藏王登山の記錄を有す。瑞西にて冬季六回及び昨年三月下旬槍への登山經驗を有す。

横　　右三名に加ふるに所望せられて行を共にしたる活動寫眞撮影師丸山、小野の二名。

丸山は夏季立山、黑郡方面の撮影に從事したる事ある由なるも登山の經驗多からず。

案內荷負衆（立山村芦峅（クラ）寺の人々）

何れも昨年よりスキーを初む。

佐伯平藏、佐伯國藏、佐伯八郎、佐伯宗作、佐伯福松、志鷹喜一、志鷹光次郎、志鷹政吉、志鷹重吉、三川兼次郎、

以上　十五名

尙遭難後救援に參加したる追加の案內荷負衆

佐伯加藏、佐伯榮作、佐伯竹次郎、佐伯政藏、佐伯鶴松、志鷹三三、佐伯榮太郎、佐伯覺藏、高尾長作、池田重次、

板倉携帶品　（字頭○のあるは遭難當時着用或は携帶のもの）

○羅紗半コート　一、特に前を二重になしたるスキー登山用のもの、

○防水上着　一、

○羅紗チヨツキ　一、

○メリヤス襯衣　三着　內二着を着用、

○黑サージズボン　一、

○メリヤスズボン下　二着　內一着々用、

○毛靴下　五足　內三足着用、

○毛手袋　三着　內二着々用、

○毛猿股　二、內一着々用、

○毛スエーター　一、
○毛襟巻　一、
○羅紗ゲートル　一、
○羅紗スキー防寒帽　一、他に瑞西製登山帽　二、
猿毛皮眞綿入チョッキ、
外部羚羊毛皮内部羊毛皮製防寒ズボン
（此の二品は何時も露營の場合にのみ用ゐたり）
○雪眼鏡　墺國製　一、　立山温泉にてガラス破壊し代ふるに黄色セルロイドを以てせり
○スキー靴　ビルゲリー式　ビンドゥングが緩かりし爲め雪入り足部の凍傷を促進したりと思はる）
○コッホアパラート　凡七合用二個　墺國製
軍隊用飯盒　一、
○メス　一、
○磁石　一、
水筒約三合の燃料用アルコールを入る、
○大形リュックサック
○スキー　一、リリエンフエルト式
馬油　一罐　小形懐爐　一、
○ピッケル、
○スキー短杖
○シュタイグアイゼン　墺國製
○鉈　一、
○登山用ランプ　一、
其他手拭歯磨コップ等雑品數種、
三田携帶品
○防水布製上着　一、
○羅紗上衣　一、
○羅紗ズボン　一、
○毛ジャケツ　一、
毛スエーター　一、
○毛袖無しスエーター　一、
○毛襯衣　一、
○毛ズボン下　二、
○毛猿股　一、
メリヤス猿股　一、
○毛靴下　五、内三着々用、
○毛手袋　三、
○羅紗スキー帽　一、
○毛襟巻　一、
○羅紗ゲートル　一、
其他手拭等雑品、
○雪眼鏡　墺國製　一、
○軍隊用飯盒　一、

○魔法瓶　約四合五勺餘入　一、
○大形リュックザック　一、
○シュタイグアイゼン　一、墺國製
○スキー　フイットフエルト式　一、
○地圖　關係地全部
○スキー靴　瑞西オッシュ式
○兩杖
小形懐爐、
横携帶品
○ローデン製登山外套
○ホームスパン上衣　一、
○鞣皮製上衣　一、
○スエーター　一、
○袖無スエーター　一、
○毛襯衣　二、内一着々用
○毛運動シャツ　一、
○瑞西製毛登山ズボン　一、
○毛ズボン下　三、内二着々用
○毛防寒帽　一、
○皮手袋　一、
○毛手袋　一、
○裏毛スキー用手袋　一、
○厚羅紗ゲートル　一、
○毛靴下　長きもの二、短きもの三、内大一短二着用
○スキー靴　一、瑞西オッシュ製
○雪眼鏡　一、瑞西製
○登山用ザイル　三十米　英國製
○ピッケル　瑞西製
馴鹿毛皮製シュラーフザック二人入　一、
防水布製シュラーフザック　一、
○シュタイグアイゼン　瑞西製
○魔法瓶　約四合入　一、
○コッホアパラート　一、
○アパラート用テローズ（固形アルコール）　三罐、
○水筒　約四合五勺のブランデーを入る、
○兩杖
○安火用大形懐爐
○スキー修理具
○靴油　一罐
○スキー　フイットフエルト式　フインランド製
○大形リュックザック
○登山用ランプ　一、
○針糸等修理具袋　其他雑品
尚共同用として凍傷に對し沃度丁幾一瓶、ワセリン一罐

クリーム、アンテイルツクス　一、
○スキー用蠟　若干
○スキー修理具、麻糸　一巻、
○マツチ二打、内一打携帯
○アスピリン
○繃帯、
○絆創膏、
○靴皮紐豫備三、
○スキービンドウイング皮豫備若干等、
○蠟燭四本。

食料品其他概要

（尤も立山温泉貯藏の消費したる物品をも含む）

米　一石五斗
（尚ほ米は温泉場に多量有るを以て持久、應急共に用ふるを得たり）
味噌　八貫
木炭　百貫
醤油　二升
鹽　若干
砂糖　太白二貫　角砂糖六箱
腸詰　六本　一本約五十匁
コンビーフ　五罐
牛罐　大四個　小拾四個
砂糖餅　七升
鰹罐　三
鰹デンプ　四
竹ノ子罐　二
福神漬　大六　小七
海苔罐　小八
小鳥罐　二
ソース　二
タラノ子罐　二
蟹罐　五
鮭燻製　大一
ソバ粉　五升　片栗粉　四百匁
小豆　四升
干若目　一貫
干昆布　五百匁
煮干魚　五百匁
干スルメ　二十五枚
お多福罐　四
からし漬罐　三

鰯罐　三
赤貝罐　二
鰮鈍　五十把
ビスケツト　五斤
干葡萄　三箱
ドロツプス　大一罐
固形スープ　百人分
紅茶　若干
コーヒー　若干
レモンテー　若干
茶精　若干
鹽鱒　四貫
干鱈　二十二枚
キヤラメル　四十五個
ブランデー　一本
葡萄酒　四本
正宗　若干
蠟燭　小百本　大一打　中二打
マツチ　四打
スクープ　二丁
箸　二把
其他着呉座若干等。（以下略）

記事

去年の晩秋の頃であつた。私は板倉と共に此冬は槍から穂高へ縱走してみやうと語り合つた。此の縱走の計畫は一年前から仲間の問題であつて、其間に小屋場の無いことが最も考へさせられるのであつた。其のため露營具を種々考へてをつた時恰も或る人より富山縣廳の招待なりとて正月頃の立山彌陀ヶ原の雪の狀態を見に來ぬかとの話を二人の間に齎らした。其後數度交渉の後三田を加へて私等は行くことに決した。夫れは此行が不幸に終つて下山した頃始めて此勸めを齎らした人と縣廳との間に誤解のあることを知つたのであつたが、三人は始終縣廳の招待に依る仕事をなしつゝ且つ自分達の始めの計畫を引延して寧ろ其大いなる計畫への準備登山として格好のものであると思つてゐたのである。勿論板倉は縣廳の仕事をなしつゝあると云ふ考への中に死去したのである。去年の暮皇子殿下に板倉と二人はお伴の光榮を得て赤倉にスキーに行つたのであるが大晦日に歸京して用意を備へた。用意とて始めての事ではないので一通りスキーの檢閲などが主なるものであつて、一月四

日の夜行で富山に向つた。

一行三人は車中の者となつて始めて解放の天地に行く自由を感じ合つた。汽車は生命に疲れ切つた枯れ野や山の國を過ぎて皚々の光の國へ、そして荒々しい海邊を進んだ。其大昔から人間の胸の中に秘められた自然への憧憬が私等にも蘇みがへつて深い息をする。それは決して好奇心と單に云ひ去ることの出來るものではない。世間的特に物的羈絆に惱む精神が原人的な至純さに歸へつて荒寥を懷くのだ。本來の健康に醒めた精神が不羈自由の天地に自らを見出すのだ。私等の前には玲瓏たる冬の山が聳ゐて招いてゐる。早くその頂に行きたい。

富山驛着後同地のスキー倶樂部電氣局並びに芦峅寺の人々が心厚き配慮に依つて非常の便宜と援助とを得て六日の朝には一行十五名が常願寺川に沿ふて積雪の上を藤橋へと登つて行つた。日は輝いてをつたが極樂坂山の頂には不斷に雪煙を卷いてゐた。雪が重く藤橋に着いた時は午後の三時過ぎで更らに鬼ヶ城へ進むには餘裕がなかつた。藤橋の雪に埋もれた屋根の下に暗い見通しの利かぬ三十疊敷ばかりの室がある。疊は一枚もない板の間でその隅の方に炬燵が一つある。歯のない目の小さな婆さんが一人座つてゐる眠つてゐるのか醒めてゐるのか薄暗いので解らない。私等三人は反對の端の小さな爐を圍んで菓子など食つてゐる。板倉が彼の婆さんは嘘をする時ハッヘンと云ふと笑はせて云ひ切つたとき確かにハッヘンと一つやつた。三人は笑つたするとカラカラと婆さんも笑つた。眺めると依然として薄暗い中に眠つたやうに座つて側にお燈明がついてゐる。突然に獨りで來て彼の婆さんに會つたら何うだらうなどゝ思ふ婆さんの頭の上には破れた提灯がぶら下つてゐる。婆さんは親切な人だ。そして世間氣の無いおつとりとした、カチカチ山の話の得意な中年の息子と長い冬を此の家で送つてゐるのである。友達が欲しいのでもなければ獵をして儲けるのでもない。湯に解いた實のない味噌汁と飯ばかり食つて一人は炬燵に一人は爐邊に座つて闇を見つめて暮してゐる。

七日も重い荷を擔つて重い雪の上を進む雪崩の危い處は河原へ降り、河水に行手を切られては亦山へ登つたりした。鬼ヶ城の小屋は、蘇生の休憩を與へる資格は無い。半ば雪から現はれて、然も圍ゐ板が方々取り外れてゐた。しかし私等は此處に一泊するのだ。人夫衆が焚木の用意をしてゐる。三人は小屋の前で滑走をする。板倉は盛んにクウェヤーシュプルングをやる。常願寺の川幅が奥まつて兩岸の尾根で隱れる邊りは藥師であらう夕日に薔薇色に輝いてゐる。その寛やかな線が大きく弧を紺青の空に畫き出して、頂の邊に斷ゐ間も無く雪煙が北に棚引く。温度は零下十二三度

であつたピッケルの鐵が手に付く。　日は暮れた。板倉は猿の上衣に羚羊の下衣、三田と私とは馴鹿の袋に入つて互ひに自分の方が温いと自慢をする。吹曝しの中で不滿のない詞を交はしてゐる、三田は星が見えると云ふ。山腹に風の鳴る音が夜通し高かつた。

八日、依然として運ぶ足は重いが湯川に入る頃から高さの氣持が何處ともなく私等を取り卷いた。

湯川の沿岸は脆弱なる火山灰で少しの濕度でも直ぐに底雪崩を時を撰ばずに出す、冬から春への登山に採るべき道ではないと思ふ。

湯川の深く刳つた谷を他く迄登りつめて這ひ上ると一段高くなつた雪の原がある。原と云つて素より湯川の爲した溪間の段丘に過ぎない。だがその奥にザラ峠の連りが夏の微温さを積雪で蔽い盡し義々たる峻險の相を誇つてゐる。

原の直ぐ近くに軒から上部を隱見させて立山温泉の家が散在する。命のない家だ。ある春であつた。イタリヤのアマルフィの近くで生活難から全村アメリカに移住し去つて棄てられた村を過ぎたことがあつた。崩壞した石灰色の壁に強い日が目映しい程に照つて龍舌蘭などが徒らに茂つてゐた、嘗ては入舟出舟に賑はつた濱邊に紫色がかつた波が靜かに卷き崩れて堂々の響を繰り返へしてをる。ローマの都二千年の昔を忍ぶのではない。今に尙その村の人達は茫莫たるアメリカの野に矢張り同じい慘ましいパンのための勞苦を續けてゐるだらう、そして時折はその美しい故郷の夢を見て暫しの慰安と係戀とを得てをるのであらう。人の匂ひの未だ消え去らぬ棄てられた住居は、その思ひが彷徨うてゐるやうだ。温泉の家に窓から飛び込む。幽氣は十五名の荒男の活氣に破られて終つた。尤も温泉は冬は無い。

九日終日雪降る。十日、風雪、十一日好晴　粉雪なり。人夫數名を松尾峠に派して道つけを爲さしめ一方數名羚羊狩りに向ふ、彼等の輪かんぢきの遠く尾根の上迄走る。私等三人は附近にてスキー練習をなし板倉に從つて教を乞ふ。まことに空も靜かな雪も輕い申分の無き日和であつて温泉から三十分餘り上の大林區の小屋の前に憩ふて紅茶など沸して樂しんだ。

十二日再び盛んに雪降る。十三日松尾よりザラの一帶雲に沒して風聲盛んに薄く雪降る。人夫衆を勵まして松尾峠上に約半量の荷を運ばしめた。若し翌日の天氣にして許さば愈々彌陀ヶ原に出でんとしたのである。九日より十三日に至る間私等は穴より出でゝはスキーをなし亦も穴にもぐり込んでの蟄居であつたが僅かの惰氣もない。天候が假令私等の活動を阻止しても自然の力が溢れる程に活躍して私等に無理な脚色ある生活を作さしめやうとしない。云ふ迄も無くかゝる不確實な日程の登山に際しては食料の充分な

る餘力を必要とする。幸ひ芦峅で佐伯靜氏より温泉場に貯藏の米罐詰等の自由消費の厚意を受けて來てゐるので變化の激しい天候を相手に落ち付いて待つことが出來た。

十四日、透徹な風の戰きが充ち渡る。日の光が頂を染めて下へ下へと這ふ。私等は過去の苦痛を拭ひ去つたやうに忘れて目映ゆい白光の山と谷とを眺めた。それは希望の朝の神が贈つて呉れた晴朗な沈默の世界であつた。私等には見るもの凡て憂の影も無く、行く處は皆晴々しい氣持に躍つてゐるやうである。松尾峠上に午後一時頃着く。何んと云ふ喜びであらう。隈なき日の晝に輝く山岳を見渡して立つた。藥師よりザラ淨土、大日に至る或は遠く或は近く皆光つてゐる。劍の重々しい姿も其奥から覗いてゐる。久しい間人の世から離れて獨り美しさを擅にしてゐた山の姿である。西北は彌陀ヶ原の曠野が眼下に展開する。一行は勇み立つて露營の用意にかゝつた。その場所は峠から三十間程東に寄つた鞍部である。先づ雪面を直徑二間位の圓形に深さ六尺位掘り下げた。スクープで切つた角な雪が飛ぶ。焚木を用意する炭をおこす、案内や人夫衆は小氣味の好い働きをした。穴の中に火が焚かれて人々はその周圍に小枝を敷いて休む。

三人は附近の疎林を綴り乍ら小さい頭の上に出た。恰も日が音なく沈み入る山々に赤く名殘の映光を止てゐる。寂しいが優しい色だ。冷やかな岩と雪とのみの世に限りなく慕かしい大氣の漾ひだ。板倉はユートピアの出現だと云ふ三人打ち揃ふて手を振り足を搖がしてスキー踊をする。裸の白樺や雪を重けに負ふた唐檜などの間から紫煙が昇るのは露營地の在所なのだ。仲間の中で術の一番優れた板倉の美しいシュプールを見返へつて三人均しく見惚れてゐた。美しい線のうねりが樹間を見事に縫つてゐる。若しか私等の生活のシュプールが此の樣にまざまざと見せ付けられるものであつたならなどゝ語る。日は暮れた。燃す大きな火が盛んに焰を擧げてゐる。それが如何にも闇の中に生命の存在を強く歌つてゐるやうだ。私等は亦も毛皮袋に入つた衣は更けて行くまゝに大力の福松もよく寢入つてゐる。平藏は何を考へてゐるのか無言に火を見つめてゐる。焰々と燃え擧つて崩れると思へば千万の火の粉がどつと舞ひ上る陽炎が勢を失ふて空の暗黑にかき消されやうとする邊りは遠い星影が瞬く、靜かな憩ひだ。山も不可思議の思ひに凝つてゐる。まさしく十五の靈は床の雪のやうな清い呼吸をしてゐるのであらう。明日を知らぬ人の定めである。けに健鬪に暮れた一日こそは尊い人生ではなからうか。

十五日　明方になつて沍えた空は蔽はれて星の光も遮られて終つた。激しい風の音が疎林を渡る、雪さへ少し降り出して皆一樣に毛皮やシュラーフサックの襟深く首を埋め

た。漸く明けて見れば蔽はれてはゐるが雲も高く風も凪いだ。そして明るい日影が芦峅寺から富山一帶に照つて次第に彌陀ヶ原の方へ登つて來る。風は西南で、山の峯を掠めて雲の流れが不斷に走る。

板倉は空を見上げて、かゝる天氣は北海道では上天氣の分だと云つた。私の經驗でも山では珍らしくない普通の天候と思つた。平藏と八郎とを露營地の整理に殘して全部室堂へと向ひ出したのは八時頃であつた。人夫衆は輪カンヂキにて三人はスキーで進んだ。だが私丈は前日左の膝を少しく挫いてゐるので途中からスキーを擔つて行つた。三人の被服は準備の處で述べてあるから略する。只其時携帶の食料を記してみやう、一休此日の豫定は、假令日景が下から登つ來てゐても雄山などは雲に隱れてゐるので先づ室堂に至り後は天氣次第で一ノ越迄行けたら行かうと考へてをつた。朝の八時に出發して午後の三時頃には遲くとも露營地に歸着するやう時間の方で豫定を定めて目的に縛らるゝことがなかつた、それでもシュタイグアイゼンやザイル懐爐迄も用意し、食料も七時間の豫定以上遙かに多量を持つてゐた。

膓詰　一ケ　百五十匁位　三本半、
コンビーフ　二　罐、
砂糖餅　大切燒きたるもの十五個、
板チョコレート　大形　五枚
干葡萄　若干
固形スープ　二十人分
ブランデー　約四合
魔法瓶　二　個　各四合餘入　砂糖入紅茶を充す

（註）此日後に遭難せる經驗より推さば、粉ミルク、葛粉なぞ最も簡單に採るを得る流動体的食料の持參を必要とする、それは疲勞度の進むに從つて固形体の嚥下難きを覺えた。

出發に際し私等三人と他の十人とは初めより單獨の行爲を以て進んだ。それは丸山外九人の一隊の目的は主として活動寫眞撮影の目的であり私等三人の一隊は出來るなら一ノ越へ向はうと期してゐたのである。私等には食料防寒具其他の準備も相當にあつたが他の十人の一隊は各自辨當を携帶したのみの薄着であつた。私等三人にとつて此の邊は各自に明るい地點ではあり仲間丈けの純然たる隊伍となつて行くとき久しく味はなかつた爽快さを覺えるのであつた。

（註）案内無しの登山は慢然と何人にも勵めらるべきものではない。然し又經驗と研究とを積んだならば何人にも勵むべきことである。殊に單獨の登山に就いては歐州に於ても種々議論の多いところで、先づ大体に於て單獨登山は勵めぬ方が好い。案内無しの登山は隊伍の

協力、統制等凡ゆる點にわたつて登山者の注意力、耐忍等を試練する。

天狗平を過ぎる。同所は北、西に面した吹曝しの尾根として冬季期間は不斷に風を受けてをるものらしく、積雪の他に比して淺く、所々に岩頭が露れてをる、雪は勿論Khuteに なつてゐて、或は粉雪の吹き固められて堅いデルタ或はその間を緩つたやうな柔い場所、或は表面氷結して踏めば破れて落ち込む所と云つた場所が續いた。天狗平を通り切つて室堂の尾根の見ゆるところに來た。おそらくは其地點から室堂迄は三四丁はあつたらうと思ふ。其處の露出した岩に腰懸けて晝食をとつた。時は十二時頃であつたが雪がちらついて風も少しはあつた。此處より丸山及び人夫衆を全部歸らしめた。そして私等は更に一ノ越へと向つた。それは此邊から更らに人夫衆をも進めるには彼等の服裝も。食料も不充分であり且つ出發の折からの豫定ではなかつたのである。若し人夫を歸へしたことが後の遭難に直接の原因ある如く考ふるものがあつたら夫は大なる誤解である。如何となれば準備の處にて述べてをいたやうに我國に於いての冬季立山は何時も人夫衆の經驗等を採用しつゝも判斷は自らが爲して行くべきであるからである。尚ほ事後の推測ではあるが若しもあの場合に人夫衆を同道して歸途同じ遭難ありとせば人夫衆全部の存命したるか否なかは疑ひ無きを得ない。私等三人は交互にラッセルをなしながら三十分餘も進んだ。然し高きにつれて風力を加へ且つ雪面堅きに過ぎて歩速頗る進まずなつた。かくてスキーを置いてシュタイグアイゼンに代へんかと語つたのであつたが、歸途万一スキーの置場所を見失ふてはとの懸念と天候も良ろしからずとの理由で室堂へ其處から直滑降して終つた。一ノ越迄せめて登りたい希ひは一杯にあつたが機を見てその執念を棄つるにも吝では無かつた。此時降雪はかなり激しく、吹雪く時は數間先も見ゐなかつた。然し室堂迄下ると雪も少しは高くなり薄い日景さへ現はれて一帶の雪原に明るみを與へることもあつた。室堂の東面は土臺から現はれてゐる三田は昨年の三月に軒の下から入つたことを語り、三人は人夫衆の言を信じて行を室堂迄進めなかつたのを非常に悔いた。ともあれ、一旦露營地に引き返へして再び考慮を廻らさんものをと、例の測候所の建物も見た。戸は固く閉されてあるが之も東面は土臺から露はれてをる。小憩、飲食物をとりて午後一時半頃であつた三人は三田を先頭に板倉、槇の順位で歸途に就いた。難なく滑走をして行く。恰も天狗平近くに差し懸つた時であつた。突然に猛烈な風が吹きつけて三人は將棋倒しに遇つた。多分二時前後であつたらう風は西北である。その疾風は激しい霙を伴つて四周模糊裡に辨ぜずなつた。倒れて跪きながら立ち上ると顏面に氷

が張りつめて目が見えない。風力は斷えず同じ強さを以て三人が立つを待たで倒し續けた。忽ちにして濡れた衣服は板の如く凍つて終つた。此の時私は三人が風に倒されたる間に互ひに見失ふ危險を感じてザイルを出し二十尺位づゝの間隔に結ぎ合はせた。そして云つた。一列縱隊に進むことは後の者が吹き倒された場合に非常に焦慮する、之れは反つて精力と時間との勞費だ、寧ろ横隊に進むにしかず、且つ此の强風に戰つて進まんには第一に腹の用意が要る、下に唐檜の疎林があつたと思ふから其處へ一度下つて食を取り夫れより天狗平の裾をからめて露營地に歸へらうと、かくて私は一二の號令を繰り返へし三人横隊を作して風に背を向けつゝ横歩きにひた下つた。直立して進むことを許さぬ程强く吹く時は斷えずストップと私は叫んだ。すると三人は等しく脊を屈めて風力に對抗した。それでも吹き飛ばされて脆き乍ら顏面に張る薄氷を拂つた。下るまゝに豫期の如く吹雪の間に狂つて佇む疎林を見た。雪原の表面に少しでも頭を高くして誇らうとする者があれば全力を擧げて碎き伏せんとして强風は唐檜の林を叫喚して荒れ狂ふた。人の体力は脆い。まことに此天地の狂亂に對しては、か弱い存在である。だが私等三人の意力は敲かれて益々高く鳴り出した。

一本の唐檜の蔭に立つて凍ゐて不自由な手や唇を動かして膳詰を食ひ紅茶を喫した。私は飽く迄此の風力に戰つて天狗平を越しさへすれば、もうこつちのものだと思つた。

（註）此の時此處から室堂に引きかへすと云ふことが念頭に浮ばなかつた。此點は如何と云はるゝも更らに申譯がない。

少憩後再びザイルを結び合ふた三人は强風に戰つて進んだ此時は三時頃であつた。行く手は天狗平の裾をからめるにあるのだが案の如くに容易には行かぬ。倒れては起き倒れては起きて寒氣と風と霙とに戰つた。素より前の如く横隊を作り三人肩を寄せて一二一二の號令の下に左右一足づゝ前に進めた。倒れることの疲勞を增す故に成可く倒れぬやう努めた。然し三人寄り合ふてさへ簡單に吹き飛ばされるのであつた。天狗平を漸く突切つた頃は日は全く暮れて雪明りのみが私等の便りであつた。やがて豫期した追分の方へ下る唐檜などの疎林に出たが風も變らず霙は雪に變じたものの依然として勢を變へなかつた。

それに薄暮と吹雪とは疎林の凡ての部分を等しく見せて何れの所より下るべきであつたか分明しない。只天狗平から續いた斜面を横切つて前進した。そのうちに斷崖の上に出た。分明しない模糊たる雪の原を行くときは全く足元の起伏すら一樣に消されて解らない。私等も斷崖の一二間手

前初めて夫れと知つたのであつた。之れは來過ぎて湯川への斷崖に面したのであるからとて引かへし更らに下りながら斜に露營地への尾根に取りつかんとした。此の唐檜の疎林の中は天狗平より滑走は遙かに苦しんだ。と云ふのは立木に遮ぎられて强風が吹きぬけるために樹蔭に深い溝が殘つて三角形の穴を作るからである。夫れが數限りも無く波の如く連續して不明の足下を脅かす。注意せるにも拘はらす不意に落込んで倒れる。場合に依つては恰度凹所の底に落込んで少からざる体力を消費して終ふ。三人は尙も號令に歩調をとつて前進した。かくて露營地への尾根に辿り付いて登らうとすると此の波狀の雪面が間斷なく上方へ續いて何うしても登れぬ。時間は早や夜の九時になつた。疾風に遭遇してより此處迄の行程は普通なら三十分もかゝらぬ位である。

私達は善後策を考へた、元氣は尙ほ盛んである。種々考慮の末、疲勞を可成加えざらんために露營と決した。而して同時に終夜寢ざるべきを互ひに約した、睡眠は凍死へ導くものであるからである。唐檜の大木の枝が積雪の爲めに下垂して風の當る側が雪で不完全な苫を作つてゐるのを見付けて下に入つた。ランプに火を點じた。火の光程荒凉の地にあつて親しみあるものは無い。細い光が風を除けてほつてゐる邊りに三人は蹲つた。然し直ちに手足が凍えて來るので自然と三人は不斷に手を振り足を踏んで体を搖り動してゐる。私は大形の懐爐に火を入れて五分毎に廻して腹部を暖めた。尤ももつと長く暖めて居れば堪え難く睡眠を催して凍傷を促進するの恐れを感じたからであつた。苦の破れて吹き込むところなどへ小枝を埋めたりした。焚火を作ることは斷念した。それは、少しばかりの小さな火なんかは反つて衣服の氷を融かして皮膚に塗るばかりである。然も大きな火を作るべく鉈の一丁ばかりと疲れ切つた三人では如何ともすることが出來ぬ。此際幾人の力ありとも此の暴風の中にあつては如何とも仕難かつたのであらう。二時間、三時間と經つて行く。睡魔が頻りに襲ふ。遂に三人は何か仕事をして睡氣より醒めんとして身体を入るゝに足る穴を掘らんとした。第一に三田がピッケルを振つてものの二尺も掘つた時であつた。突然立つてゐた三田の足下に大穴が開いた。危く落ち込まんとして這ひ上つたが其穴は如何にも深く繩を便りに下りて見ても底に達しなかつた。之れは私等は大木の根元に休んでゐる如く見ゆるものゝ實は積雪に依つて少くとも二十尺位は上部の所にをるのである。であるからたまたま掘り下げて行く中に下枝に依つて雪を避けて生じた空間に掘當てゝ終つた譯であつた。かくして私等は暗い穴の爲めに一番風當りの少い避難所を失つて止むを得ず吹き込む所に立つた。そして不斷に三人は足

踏みをしつゝ間を置いて紅茶を飲みチョコレート、腸詰、餅などを味つた。若し一人が强烈に睡くなつたと告ぐる時他の二人は盛んに肩や脊を敲きつけて覺ました。或は幹に体を打ちつけて意識を取り戻しなども度々した。

風は止まぬ吹雪も激しさを減じない。だが二人は睡魔と寒氣とに戰ひ乍ら緊張の時を送つた。時間は蠟燭の火と共に經つて行つた。明け方に三田が先きに次ぎに私が强烈に睡くなつた。その甘き眠りの强き魅力よ、一切の寒氣も疲勞も忘れて專らに夢遊の鄕に入らんとする、而も死を以てさへ恐ろしからざる眠りへの係戀だ。私等は覺めんために友に敲かれ且つ努むることに苦痛を感じた。

十六日　闇が薄れて朦朧たる吹雪の朝が來た。夜明次第出發と用意して待つてゐたので直ぐに出だした。最後は私であつたが此の時板倉は左のスキーのビンドゥングが凍り付いて非常に手間取つてゐるのを知つてゐる、テローズの火で暖めてやつても皮は尙ほ短かつた。そして苦勞してゐる板倉の顏に爭はれぬ疲勞の影が濃く差して見えた。三人が聲高く呼び乍ら更らに西へと進み出したのは七時頃である。約一時間ばかり進んだのであつたが依然として何れの尾根が松尾に當るかが解らない。只の瞬間で好いから見通しの利くやうに晴れて呉れと、吹雪の走る彌陀ヶ原を注意して歩んだ。此時であつた私は若し此儘で今夜を迎えることになつたら命の問題が現はれて來ると明確に知つた。故に私は方針を定めた。それは私等の下つてゐるのは松尾に續く尾根の彌陀ヶ原に面した傾斜である。故に如何ともして一旦其尾根の上に出づべきであると。恰も地圖と磁石とを便りに吹雪の薄れた間を見通すと遙か上方に疎林の影が小さく見える。私はその一團の先きが松尾峠であると考へてそれに登るべく決した。風は力を減じたが雪は盛んに降つてゐる。昨夕の霙ですつかり板の如く凍つた服の上も眞白である。目的と定めた尾根に取りつく迄は非常の勞働を要した。代る代るラッセルをしたのであつたが板倉はラッセルのたびに私から杖を一本借りてピッケルと代へた。かゝる事は板倉には嘗て無かつたことで、私は少からず不審を懷いて、その疲勞の增して行く樣を注意した。然し寒氣のために休憩をさることが出來ない。そして左手の中指が白色に變じたのを認めた、勿論之れはピッケルから來た凍傷であつた。手袋は二枚かけゐた。板倉は短杖とピッケルとを用つてゐたのである。雪は濕氣を豊滿に含んでゐるのでラッセルは重い。然も膝上に達する深さの登りであつて其間に三人は疲勞の度を益々加へた。朝の八時過ぎより十一時過ぎ迄約三時間を要して尾根に出た。私が松尾峠と考へた地點は松尾よりは遙かに東に寄つての天狗平の頭の直ぐ近くであつた。然し居所の地點が正確になつたので私等

は万難を排して尾根を傳ふて松尾の露營地に辿りつかんと決した。此處に少量の食を採つた。尤も前日強風雪に遭ふや否やの時から私等は食料制限を斷行して來てゐる。尾根傳ひは最も艱難なるものであつた。例の立木の蔭の波狀の雪、而も重き股に達せんとする深さを風雪に戰つて進むのだ。板倉の疲勞は急激に進んで度々意識の遠ざかるを訴へた。その度毎に杖を以て肩を強く打つた。私がラッセルをなし次に板倉、三田は板倉の後について打つ役をなした。打たるゝ毎に板倉は氣を取り戻して、もつと打つて呉れと廻らぬ舌で語つた。此頃から三人の舌は重く厚くなつたやうで詞が短く、力なく切れて出た。私は一心になつて露營地へ目指した。そして初めて前々日伐材した切り株を見出した時、そして直ぐ側に七八丁のスキーと二丁ばかりの鐵砲が雪の中に半ば埋れて立つてゐるのを見出したとき、もう命の問題は過きた。大勝利だと云ふ氣力が、むらむらと焰の如くに燃ゑ立つた。

そして二十間ばかり遲れて續いて來る板倉と三田を待つてもう大丈夫だ、握手をしやうと手を出した。然し三田も板倉も再生的な喜色は現はれてゐず、握つた手にも力は無くて消沈の色が見えた。これは後に三田から聞いたのであるが板倉は露營地點に火氣のあることを餘程期待してをつたらしい、そのため人影の無い荒んだ跡のみを見出しても、それは落膽をすゝめたかもしれないが元氣を回復するには力が無かつたのであらう。そして自由をさへ失はふとしてゐる程の極度の疲勞の身にわれと氣を勵まし鞭打つて他の私等に一言の氣儘をさへ云はなかつた板倉の胸の中は何んなに苦しかつたらう。私等は食をとつた。人夫達は十五日に私等より一時間ばかり先きに室堂の近くを後にして歸へつたために暴風雪には露營地點近くに來て出遭つた。そして前夜露營した雪中の穴居に潜り込んだのであるが吹き卷くる强風に、さしもの大きな焚火が一吹きに吹き消されて終つたと云ふ。そして主として木綿の薄着と毛皮丈の彼等は全く凍えて、その最も勇敢なる者でさへ穴より出でゝ、上から薪を運び込むことさへ出來なかつたと云ふ。平藏、八郎、宗作其他皆が私等三人の安危に胸を痛めたことは云ふ迄もない。そして遂に凍死と云ふ危難が目前に迫るに及んで漸くにして立山溫泉に降つたのであつた。私等が露營地點に來た時その穴は半ば埋れてをつた。時に午後三時、之より三十分の努力である。後は下り一方の風を避けた容易なる滑走であると、私が先頭にラッセルをなし板倉を間に三田は專らに板倉の介抱に努めた。三十分の豫期が捗らぬ途中數度板倉の左のスキーが外れた。然しもう自らそれを穿つ氣力は無いやうで苦し氣であつた。私は板倉のリュックザックからザイルを取り出して擔つたり又脫げたスキ

立山頂上よりみたる室堂附近一帶の高原　（慶應山岳部）

ーを穿せなどした。その度毎に氣の毒だ濟まないと云つた。然し板倉の意識は次第に薄れて自らも、何も解らなくなつて來たと洩した。私等は板倉の荷を取つてリュックザックを空にした。松尾峠の上迄はこんな事や雪が深くて重いために意外の時間を要した。そして峠は湯川に面した側が風ですつかり雪被（ゴーニッシュ）になつてゐたので、私はザイルで体を結んで下つて見やうとした。三田がその端をピッケルに卷いて深く立てゝ保つてゐる。側に立つた板倉は濟まないなど云ふ、見れば眼蓋が腫れ上つてゐる。唇も腫れ上つてゐる。おいワンデー、鼻の下の氷位は取れよと三田は云ふ。眉毛も凍つて白い、三田の鼻下が蒼白に變じてゐたのも私は知つてゐる。私等はチョコレートなどを食つた。三日前には此處に三人元氣な姿で連峯の雪景色を縱にしたのだ。然るに今は何うだ。吹雪の中を困憊の体に鞭打つて歸還を急ぐ退軍だ。然し待てよ、未だ私等の胸の中には生命に對する執念の意力が燃ゆる。樂んだり笑つたり泣いたりすることは婦女子も出來る。忍從、暗い運命への忍從それは山男の仕事だ。

雪被に下つて見渡すと三十間ばかり西に寄つて雪被の無い箇所が下の雪溪に續いてゐる。三人は其方に進んで行つたが積雪は殆ど胸に達して度々各自のスキーが脫れた。松尾峠から直下の雪溪を降り始めたが日はすつかり暮れて重

い闇が雪に惱やむ三人をひしひしと取り圍んだ。尙ほも私は先頭に立つて電光形にラッセルをして下つた。三田はえず板倉の肩を杖で打つて意識を呼び戻してゐる。電光形に進み乍ら其キックターンをするときは疲勞と殆ど無意識に近い板倉の術が際立つて正確であつた。その内に、板倉は又も何も解からなくなると訴へ出した。然も夫の訴へが次第に間が遠くなつて夢幻の中を歩んでゐるやうであつた。私は板倉の肩を強く敲いて、おい板さん、おれ達はヒマラヤで死なうと望んでゐるのじやないか、松尾で死ぬ筈じやないぞと云ふと、重い返事をして、おれにも分る、だがおれの身体はもう自由にならないと答へた。もの〻三十分も下つた時であつたらうか、板倉の右のスキーが先きを下に深く斜に突き刺さつて終つた。板倉は腰を下ろした。それは再び起ち上ることのない永遠への跪となつた。私は其右のスキーを懸命に掘り出した。その中に左のスキーも脱けてしまつた。而も板倉の精神は只ひたすらに深い眠りへと落ち込んで行くやうである。私は搖すり且つ強く繰り返へして敲いた。すると三田が側らに立つてゐて、おれも何だか譯が分からなくなつて來た。そして非常に寒いと云つて戰いてゐる。私は三田を叱つた。それは此場合の彼れの無爲を考へたのではない。考へたとしても謂なきことなのだ只板倉と同じく眠りに急ぐ彼の靈を呼び止めたいのだ。すると三田は決然として云つた。

われ等三名斯うしてをつても遂には死するより道が無い、おれは懸命に下りて立山温泉に迎り着いて人夫が居たら直ぐに救援に來させやうと云ふ。私は板倉の体を搖すり乍ら答へた。自分としてはかゝる危急の際に隊伍を分散することは不賛成を稱えたことだ。そして今も然う思ふ、それは君も殘つた者も凡ての死と云ふ決着以外には齎らし難いことだからだ。そして若し温泉場に人夫が居らなかつたなら何うすると云へば三田は若し人夫が居らなかつたならピッケルで戸を破つて入り湯を魔法瓶に詰めて來てやろうと語る。私は考へた。そして三田の主張を容れてそれでは行つて呉れだが恐らくは之れが生別だと思ふから互ひに挨拶を爲やうではないかと話す。そして固形スープを板倉の口に入れ自分達も食つた。互ひに左樣ならと語を交はしたが私は深い悲しみの思ひに、敢えて三田を見送る元氣が無かつた。三田は私の教へた通り雪溪を下つて行つたのであらうもう音もしない。三田の別れて行く時でさへ板倉は全く無意識であつた。板倉の腰に三田が置いて行つた乾いたスエーターを卷いた。假令乾いた衣服があつても固く凍つた服を脱がせることが出來ないので單に打ち懸けたに過ぎないそれから私は例の懐爐に點火しやうと努めたが之れも板の如く凍つたりリュッザックの口から雪が吹き込んだため、

どの灰もどの灰も濕つて火が付かない。マッチとて一本擦れば其出した箱全部が濕つて終ふのだ。有る丈のマッチ凡そ七つ八つを擦つたが幽かな小さい焰を見せて直ぐに消えた。もう懐爐は駄目だとばかりリュックザックを空に敲き出して板倉の尻に敷いた。そしてリュックの中に漸くにして乾きを保つてゐた脊廣の上衣を出して板倉の肩に懸けんとしたが驚く可し。己が兩手も上衣も灰のために漆の如く黑いではないか。黑い手で黑い衣を懸ける。氣心の惡いことだと懸命に兩手を雪に擦つたが何うしてもとれなかつた板倉を斷にず敲いたり搖り乍ら名を呼んだ。そして可成く長い詞の返事をさせやうと努めた。三田が去る頃であつた突然板倉は此處は何處かと聞いた。松尾であつて直ぐ下が温泉だから急がうと云へば君は誰れだと更らに聞いて、あゝ然うか横の後に付いてゐること丈けは分るが他は何も分らぬと云つた。然し三田が去つてからの彼は苦しさも見えず心地よげに深い息をして眠りを貪るらしく見えた。かくして搖する、呼ぶ、敲くの何時間か吹雪の中に續いて行く場所は恰も溪の眞中頃で風さへ避くることが出來ない、雪は重くして腰に達する深さだ。運ぶことも動かすことも私の力を以てしては不可能であつた。只溪の傾斜が三十度近くもあつたらうか既に横臥した板倉の体を落さぬやう私は兩足のスキーを水平にして下から支ねての仕事であつた。

此時に一時兩足に非常の疼痛を覺えたが暫くにして何も感ぜずになつた。何時頃であつたか知らない。支えた私の兩手から板倉は突然に立ち上ると見る中に頭を下に飛び込むやうに落ちた。その勢で小さい雪崩を起して三十間も下に落ちて弓なりに伏して動かぬ。愕然として直ちに下りて急いで顔の雪を吹き拂ひ激しく上体を搖すつた。かすかに答へた。それは細り行く生命の焰が、かすかに深い奥でゆらいだのではなかつたらうか、其後彼の眠りは更らに深まつて行くばかりで呼べども叫べども最早返事も無く只心地よけに眠るらしかつた。確かに其頃は私自身も喪心に近い狀態にをつたのであらう。ふと氣が付くと抱ゐられてゐた板倉は狂つて胸の邊りの衣服を拷つた。そして奪ふ如くに右手の手袋を取り棄てた。私は左手を強く敲いてそれを止めた。すると彼は再び深い眠りに入つて平和な憩ひを續けてゐる。再び私は愕然とした。それは彼の呼吸が變調を來してゐる。總身を絞り出すやうな深い息を三度吐いた。吐いて棄てるやうに首を落した。手も足もがつくりと延びて力を失つた。私は全身の力を込めて上半身をしばらく搖すつた。然し彼れの手も顔も氷よりも冷やかに呼吸も鼓動もない。死は遂に來たつた。時計を凍つたポケットより出して見る、正に十七日午前零時五十七分である。何んと云ふ不思議であらう。今迄降りしきつた空が見渡す限り晴れて星屑

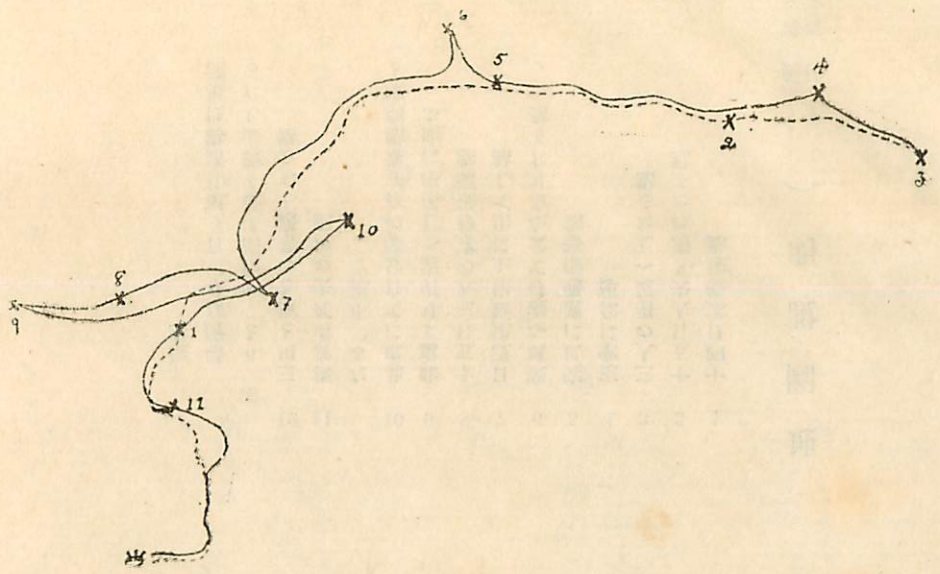
地圖說明（……往路　——歸路）

1　十四日露營地點
2　十五日人夫と別れたる點
3　三人の引返へしたる點
4　室堂に休憩
5　突風に遭遇推察點
6　突風を避けて食を取りたる點
7　日沒後斷崖上に出でし點
8　十五日三人の露營推測點
9　此處より引返へし尾根に向ふ
10　此處にて自分等の存在地點明瞭となる、小憩。
11　板倉君死去の地點
12　三田と槙との遭遇したる點

附　6と7との間は最も難澁したる場所なり、自5至10諸點は推測地點。

立山遭難地略圖

（參謀本部地圖 $\frac{1}{5.0000}$ に重ね參照ありたし）



松尾峠頂上より見たる天狗の平の森林　（慶應山岳部）

に充ちてゐる。直ぐ近くの松尾峠の上に大きい星が輝く。何んと云ふ近い光だらう。彼の靈は此の世を棄てゝ去つた無言に去つて行つた。然し必度あの無言の中に、降る雪の幽かなその音の一つ一つを拾ひ乍ら安らかに名殘りを告げて行つたのではなからうか。そして此の澄み切つた深い空が暫し輝いて迎にたのではあるまいか。彼れの靈はその星の群る大空に好きな「王樣の馬は」を歌つて惱みと喜びとの假の世を棄て去つたのであらう。光の空は直ぐに蔽はれて亦も雪が降り出した。薄雪が彼の屍を蔽ふた。そして私の体をも裝ふた。一切を抱く自然の懷だ。悲しみも病をもその無邊際の靜けさの中に優しく抱いて呉れる母だ。何こて不滿があらう。私は屍に語つた。三十年の命も二十年の命に比しては長からう。又七十の齡も百年の齡を思へば短かいであらう。生きた時間が問題ではないのだ。定めし君は滿足な生涯を終へて此世を去つたであらう。只一緒に在つて遲れた自分は濟まないこ。すると堪ね切れぬ程に死が慕かしくなつた。板倉が初めに倒れた場所に歸つて雪の下よりブランデーの水筒を掘り出し、これを最後と心から溢るゝやうに飲んだ。其後私は二度蹣跚け乍ら立ち上つたのを覺えてゐる。必度或る時間は倒れてをつたに違ひないと思ふ。然しふと氣が付いて之れは卑怯な振舞だと云ふ意識が恐ろしく明瞭に響く。再び屍の下に歸へつて板倉の頸に私

の頸を擦り付けて温めやうこ努めた。が氷よりも冷やかなる冷氣が私の總身に走つて戰いた。見れば板倉は手足も固くはなつてゐるが、顏を伏せて寢てゐるやうである。救援は何うしたらうと叫ぶ。木靈は空しく消えて返事が無い又叫ぶ、聲は無い、だが雪を踏む音がする。如何にも調律的に規則正しい足音だ。多分强力が緊張し切つて深い雪を蹴破つて來るのだらうと耳を澄すと聞えぬ。亦現はれる。消ゆる。私は絶ゆ間なく此の調律的な然も何時迄も近寄らない足音を聞いた。

（註）　板倉の臨終に至る迄ブランデーを飲ませなかつた。ブランデーは人も知る如く興奮劑である。去年の三月槍に登つたときであつた。常念乘越の小屋で常に酒を口にするこ直ぐ倒れる友人に紅茶に少量のブランデーを入れてすゝめた。忽にして昏睡狀態に落入つて終つた。板倉も同じ体質の人であつた。アルコールに對する特異体質の所有者なのである。故にブランデーが他の者に對して興奮劑とならうこも板倉にあつては單に麻睡劑の用をなすに過ぎない。私は板倉が倒れてから飲ましてみやうかこ非常に惱んだが遂に死に至る迄之れを敢てしなかつた。只せめてもこ思つて口に含んで顏に吹き懸けたが其結果の果して良かりしか否かは未だに私には解らない。尤も雪中多量の飲酒の何人にも不可なるは言を俟たない。

三田こ別れたのは暮れて間もない七時頃であつたらう。夜中に板倉は死んだ。私は屍を抱いて救援を待つてゐた。消ゆてはまた續く足音に呼び懸け乍ら次第に過ぎた。そして雪降りの明け方が再び訪れた。薄明の中に自分を見出したとき、闇の夢幻が薄れて明瞭な意識が蘇つた。それは三田が温泉場に着いたなら如何に遲く見積つても既に救援の來てゐるべき時だ。來ぬところから推せば三田もやられたに違ゐない。私は二人の友を失つて終つた。板倉の屍の在り場所は明かだ。今は三田の安危を尋ねなければならないこ考へた。以前に倒れた場所に登つて板倉のスキーを一本目標に立てたそして私のピッケルを持つて來て屍の止めにしたでなければ傾斜のために摺落ちるからである。かくして私は板倉の屍を離れて雪溪を下り始めた。其時は午前六時近くであつた。すると直ぐ近くに人影らしいものが倒れてゐる、胸を戰かせて近寄るこ幸にもそれは積雪の裂目であつた。尙ほも三田の名を呼びつゝ三田に敎へた道を下る然しシュプールは更にない、薄明の中に雜木林が影の如く浮ぶ。そして變りない湯川の響が遠くから昇つて來る。遂に私等が峠こ云つてゐるところに來る立山温泉迄三十分はかゝらぬ近くだ。其處から雜木林に入ると新らしいシュプルーを見付けた。五分程も下つたこき下から紛う方無き三

田の聲が答へた。三田は終夜幻覺に迷つて未だに其邊に彷徨うてゐるのであつた。彼れは不可思議な幻を見てをつたのだ。或時は人影が現はれて導きをしたり或時は半天に黑線がかゝつたり、或は高い煉瓦塀に四圍を圍まれたりした。又或る時は斷崖に片足のスキーが引懸つたまゝ蝙蝠のやうに下つてゐた。そしてもはや自分も駄目と思つたらしい。遺書を認めてゐる。それは煉瓦塀のために何うしても前進が出來ないで死する。松尾の二人を助けよと云ふ意味のものであつた。かくて友の姿を見て互ひに新らしい悲しみが込み上げた。二人は無言で温泉場に向つた。前に入つた入口は開いてをつた。二人の入る音を聞きつけた人夫衆は驚愕の聲を發して飛び付いて泣いた。その中の幾人かは直ちに板倉の屍を齎らしに出懸けた。私等二人は到底語では云ひ盡せない暖い注意周到な看護を受けた。私等の凍つた衣服は切り破つて除いた。靴は足に凍り付いてゐた、頭髪も板のやうであつた、然し彼等は交代に体温を以て温めて呉れた。そして微温湯の味噌汁を幾杯こなく飲んだ。蘇生の思ひと云ふ、彼れ等に依つて救はれた私は其暖い心根を不斷に忘れることが出來ない。

板倉の屍を取りに行つたが積雪胸に達し且つ吹雪のためその地點迄行き得ずして歸へつて來た。私の兩足は腫れ上つて歩行が出來ずなつた。

十八日　吹雪く　人夫衆は朝早く起きて松尾峠に向つた初め私の敎へた塲所は皆目雪に蔽はれて何も見當らなかつたが、その地點を杖で敲いて斜に倒れた板倉のスキーを見出した。そしてそこより三十間も下方に屍は以前の通りピッケルに支えられてあつた。小さな雪崩が屍の一二間上の處迄押し出してをつたと云ふ。遺骸が運ばれて來たとき顏面も手も非常に腫れて四肢は固かつた。夜は八郎の讀經で一同禮拜をする。小さな机の上に線香がくゆる。蠟燭の光が思ひ出したやうにゆらめいて屍の上にためらう。その側に小さな珠數が見える。それだ、温泉に來ての日であつた。室の棚の上に物を置かうとして手を延ばすと此の珠數が指に懸つた。緣起などはつい擔いだことのない私だが何んな調子であつたか之れが非常に氣持惡るく感じた。そして温泉を後にして松尾に向ふ朝だつた。その棚から荷を取り下ろさうと手をやると亦も此の珠數が指に懸つた。こんな事を云ひ出せばもつとある。それは松尾での露營の夜であつた。板倉と八郎との飯盒の蓋が誤つて火中に落ちた八郎のは何んとも無かつたが板倉のは落ち込むや否や煙草の銀紙のやうに熔解して終つた。人夫達は緣起でもないと罵ぎ込んだことも あつた。

遺骸は一晩附近に火氣を置いたら腫れも無くなつて四肢は生きてゐるやうに柔軟に歸へつた。

十九日　雪降る　平藏八郎の二人を殘して丸山小野はじめ人夫衆芦峅に下る。

二十日　好晴　碧き空、輝ける峯々、さながらに變りなけれども友の靈は去つて在らず、凍傷に惱んで遺骸の側に座す、三田は頻りに不眠症の苦を訴ふ。

二十一日　午後三時頃であつた、ホーホーと云ふ聲がする、下山したる八名に新勢十名を加えて登つて來る。芦峅の人夫衆のエホー、ホーホーと云ふ抑揚は瑞西山村のものと殆ど同じ調子のやうだ。闇の家の中に活氣は横溢して來る暮れて、一同が集つて物語りをする。見ると眼光の恐ろしく鋭い男が入つて來た。見詰める眼は射通すやうに坐つてゐる。彼れは徐ろに重い口を開いた。

槇さん、おれは七度此の足の爪が生ね替つた。凍傷は決して失望して切つてはいかん。これだ此の爪もだ。それからだ、おれは二度に三人の仲間を雪崩でやられてゐる。又も失くして歸へるときの心持が分るだらう。いゝか、君はいろはのいの字丈けを知つたのだ。おれには未だろとかはとかある。ほんの學問をし懸けたばかりなんだ。それで山が嫌になる位ならお前は男じやない。おれは十三の時から山に入つてゐるのだ。いゝか、君はいの字丈を知つたんだぞ云ひ終つて彼れは高く笑つた。滿座は默念として聞いてゐる。超人的な男だ。强靱な精神の所有者だ。彼れは甘くない眼光が語つてゐる。運命と永年戰つた强い響だ。そして金なんか何んでもないと蹴飛ばしてゐる。高所を歩む傷善を知らぬ赤裸々の力だ。彼れの名を加藏と云ふ。黑部の溪谷の埋れ木だ。

二十二日　湯川より濃霧卷き昇り霙降る。然し下山と決す。遺骸は包んで橇に乗せた。三人の体を結んだ彼の繩で持つて九人の男衆が引く。私は福松の脊に負はれて後につく。三田はスキーで從ふ。橇は雪の中に深く食ひ込んで澁る。男衆の懸聲が濃霧の中に消ね行く。橇は一ゆすりゆれては又進む。

二週日の前に此處を過ぎた時は雜木林も眠てゐた。然し何んと云ふ生命の力であらう。木の芽は遙かに延びて色付いてゐる。自然は再び生の悅に燃ねるであらう。だが板倉はもう此春を見ることがない。屍の上には霏々として雪が降る。永遠の冬だ。快樂なんぞは元々自然の齎らす氣まぐれなんだ。冬の子だつた彼れは死處を得たのだらう。然し殘る者には悲しみが深い。嘆きの門を過ぎて癒ねぬ傷手に惱む。

霙が風さへ交へて行程は非常の艱難なるものであつたが彼等の意氣と努力とに依つて藤橋迄下つた。此處からは芦峅の青年團が道を付けてをいて呉れたし又も新らしい加勢を加へて二里の道を芦峅に向つた。闇が來た。迎えの提灯が

點々としてゆらめく。暖い心の友や村の人の出迎へと至れり盡せりの用意、村の佐伯靜氏の邸には佛を安置する裝置さへ滯り無く作つて待つてゐて下された。

檢視の醫師の言である。板倉は生前既に顏面、兩手、兩股兩足の凍傷に罹つてゐた。又板倉は此正月に胃を害ふてゐたとの令兄の話である。登山中一度も其苦痛を聞かず至極元氣だつたが三人中あんなに早く凍傷に罹つて而も殆ど無抵抗的に死んだ始終から思へば、矢張り胃か何處かに內在的な缺陷があつたのではなからうか、其夜遺骸は荼毘一片の煙と化して、慕しい板倉の姿は、永遠に私等から去つた

冬季登山の傾向が現はれて來て以來私等は常に Katastrophe を恐れて注意した。而も悲しむべき運命は第一に私等に來た。だが堪に切れる丈けは堪にたのだ。その運命を甘んじて受けて堪に戰つた。そして溫泉場にもう二時間と云ふ近い處迄來て板倉は死んだ。そして私等は破れた。だが此事だけは誇を以て云はふとする。それは死する程に疲勞困憊した板倉も、自ら死を以て救援を求めに下つた三田も此の四十時間にわたる艱難の中に在つて徹頭徹尾協同と友の安危のために終始した事である。

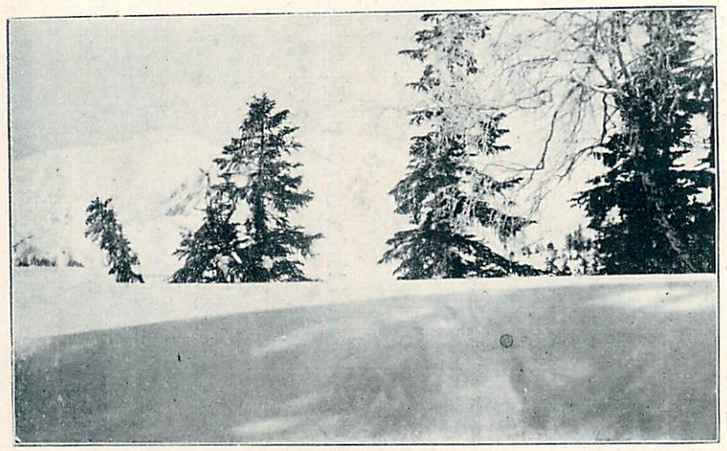
只の一度すら自己の氣儘を洩らした事は無かつた。私等は死に至る迄一つであつたのだ。だが何う思つても思ひ切れないのは板倉の死だ。皆んな彼と共に在つた日の事は慕かしい思ひ出だ。何うか此文の終結として其一二を語らして戴きたい。

それは去年の八月であつた。

私等が穗高の唐澤の岩小屋の下に露營したときである。雨の激しく降る闇の夜は更けて行つた。私はふと歌の聲に目が醒めた。見ると板倉である。小聲に歌ひ乍ら這松の枝を火にくべてゐる、不完全な岩の庇の下のことゝて雨は飛沫いて吹き込んだ。端に一番近い板倉は脊に雨を浴み乍ら無心に歌つて火をたこしてゐる。仲間は皆熟睡してゐる。そして外には山が地の底から鳴つてゐた。私は恰も母の懷に抱かれて聞くやうにその歌に聞きとれて何時とはなく再び深い眠りに落ちた。板倉は今も何處かであの歌を謠つてゐるだらう、それは Ein König だ。

これも去年の事だ。秋に一緒に北海道に旅をしたことがあつた。その時板倉が札幌在學中限り無く愛してをつた錢函の海邊の丘の上に立つた。丘の上に立つて淼々とした海原に眺め入ると既に此の北の海には冬が來てをつた。

今しも暮れた海面に疾い風が走つて波頭を立たせてゐるそして次ぎから次へと際限もなく大きい波が寄せて見果てのつかぬ長い汀に碎けた。碎けて蔭鬱な北の便りを繰り返へして響かせた。空には一しきり吹雪かせて過ぎた雲が遠くに一團になつて群り立つた。恰度怒りに狂奔して見たも



松尾峠頂上より大日早乙女の連山を見る　（慶應山岳部）

のゝ無抵抗な空の廣さに疲れて暫しの靜止を擅にしてゐるやうな姿だ。その群りの上邊に地を去つた日の名殘りが映じて銀色にほの明るい。その上にかすれかすれて星が二三明滅する、板倉も默つて夫れを見詰めてゐた。

どうだい、慕かしい光だな、凍り附いた空の底から洩れて來る光は小さくても恐ろしい力だ。あれを見詰めてゐると喜びも悲しみも無くなつて、何んだか生れ變つたやうな生氣が溢れて來るじやないか。と私は話しかけた、すると板倉は

然うだ、そしてその清々した透き通つた氣持で自由の翼を得て大空の奧迄飛びたい、此の大地を搖する大波の音を聞きながら。

と云つた。

それも今は思ひ出だ、再びと出來ない事になつてしまつたそして其處にも亦春が來たらう。だが板倉の靈は何處に行つたらう、よく

鳥よ何處に彷惶ひ行ける、星住む里か果た海の面か、と云ふ歌を一緒に立山溫泉で歌つたつけ、そして十五日の吹雪の露營のときに歌はふと云つたら三田が時でもない陰氣すぎると斷つたつけ、私には何も分らないのだ。

然し板倉は私に此事だけは敎へて去つた。それは此命の尊嚴と云ふことだ。

（終り）

板倉君の死と私の懺悔

六鹿一彦

板倉君が死んだ。

どんな原因で死んだのかと云へば、天候不穩の爲に遂に凍死したとの話である。しかし何故凍死する樣な事情になつたのかと云へば、一月の嚴冬に立山へスキー登山を企てた爲である、一月の立山と云へば新雪は尙深く柔く、其上日本海沿岸に最近く高く聳えて居る爲に、雪は絶にず降り風は常に荒れて、カモシカを追ふ獵師も未だ入り得ない時期である。其んな時に、前人未知の冬の山へ入らうと云ふのだから、登山とスキーに餘程の自信がなければ出來ない事である。處が不幸にして板倉君には此の自信があつた。しかも其の自信を裏切らないだけの十分の智識と經驗とを持つて居た。其上自然界、特に山岳に對する燃ゆる樣な熱愛があつた。だから板倉君が死んだのは、此の登山とスキーとに關する智識と經驗、及び山岳愛好心が原因なのである。即ち板倉君は此の二者に殺されたのである。

さて其の二者の中で、山岳に對する憧憬は從來の君の生活が此れを助長し發達せしめたとは云へ其の根本に於ては生來の素性であつて、責は板倉君自身には有しない。無論君の周圍の誰にも負はせるべきものではない。全く君の心を創つた神……或は宇宙……が責任を有するのである。しかし幾ら山岳が好きで、冬の山に憧憬れたとて、其の希望を達する手段を持たなかつたならば、立山で凍死する氣遣ひはなかつたのだ。唯徒らに心であくがれて、其の熱情の漲溢する結果が詩や繪畫となつて未見の夢の國を讃美して居るに過ぎなかつたであらう。世の中には此の種の人が可成り居る。不幸にして板倉君は、空想と憧憬との國に至る

扉を開く鍵を持つて居た。そして其の鍵が遂に君を殺したのである。此の鍵を與へたのは誰か。春秋の筆法を持つてすれば、此の人間が正に板倉君を殺した事になる。此の殺人犯は誰か。

それは一人ではない。しかし餘り多くの人でもない。その多くない人の中には私も混つて居るのだ。君の凍死を知つた時、君自身の爲ではなくて、君の御家族の方々に此上もなく濟まなく感じた。何しろ私が板倉君を殺した者の中の一人なのだから。私は此處に板倉君の札幌生活を追想して、如何にして私が君を殺したかの懺悔がしたいと思ふ。

私が板倉君を知つたのは大正七年の暮も押し迫つた頃、東北地方のスキー地として有名な五色温泉に於てであつた當時君は學習院高等科に在學中で同級のスキーを好む四五人と共に同所で練習滯在して居た。私は矢張り二人の友人とスキーの爲に同所へ行つて、好む道の事として直に親しくなり、色々と話し合つたのである。當時君等は翌秋入學すべき大學の事に就いて話して居たが、其内に君の友人の一人が君等の友人間に特有なノンビリゆつたりした口調で、「ワンデー、お前は本當に札幌へ行くのか」と板倉君に尋ねた。ワンデーは君の綽名だつたらしい。その時板倉君は曖昧な返事をして、改めて私等に札幌の學校に就いての意見を求め始めた。私等も實は困つた。札幌と比較す可き駒場の内容に就いては殆んど何も知らなかつたし、札幌の内容其物だつて明確な智識には乏しかつたのだから何と答へてよいやら「サア……」と云つたなり暫く沈默して居たが、其の中に「スキーをやる爲には理想的な學校ですよ」と答へた此の一語が、今日の不幸を招致する最大原因を爲したのである。此の事を思ふと實に物淋しい厭な氣分に襲はれる。私が不用意な此の一語を發しなかつたならば或は札幌には來なかつたかも知れぬ。さすれば幾何板倉君が山好きでスキー好でも、あれだけのスキーに對する智識と經驗とは東京附近に居て五色や赤倉邊へ出かけた位では得られなかつたに違ない。そして何事にも、特に登山時には萬事に注意の行き屆き、萬全の準備をして決して危險を冒さない君の事だから、或は未だ／＼立山までは乘り出して居なかつたかも知れぬ。否確に行つては居ない。だから不用意に發せられた「札幌はスキーをやるのには理想的な學校ですよ」と云ふ一語が、此の時に於て既に板倉君の今日の不幸を運命づけてしまつたのだ。

だが此の一言によつて板倉君が札幌入學を定めたのでは勿論あり得ない。君の令兄も札幌で學ばれたので、君が三年間所謂「御小屋」と稱せられた下宿生活をして居た郊外に近い家は、令兄の前に假寓せられた家だと云ふのだから、君の札幌入學は私等の一言とは直接關係なく決せられたの

霞澤　左より三人目

（右）山頂のトランプ　燧岳頂上

日光菅沼　清水（左）

――山に於ける板倉君――

であらう。しかし自分で進んで入學する氣分を促進した効果は確に認めねばならぬ。そして君の札幌入學の眞意は何處に在つたか知らぬが、表面上、戯談としては全くスキーの爲に札幌へ入學した事になつて居た。其れで一寸面白い話があるが、君が一時假寓して居た大學のH博士に最初會つた時、偉大な体軀に人を威壓する樣な容貌と音聲とを持つH博士が「お前は札幌へ何しに來た」と尋ねた。普通なら、「作物の改良を學びに」とか或は「牧畜がやりたくて」とか答へる處を、之は又思ひ切つて「スキーをやりに來ました」と嘯いて流石の博士をして二の句を繼がせなかつたそうである。そして此の明言通り君は確にスキーをやりに來たのに違ひなかつた。「板倉君に會ふなら學校よりも山へ行け」と云はれた位、雪の良い時は忠實に山へ入つて專念スキーと山とを樂んで居た。君は別に學校を怠けたのではない、其の證據に、三年目の春には確に學校を卒業してしまつた。君が山に入り、スキーを穿いたのは、普通の學生が學校に通つてノートをとり、顯微鏡をのぞくよりも、もつと眞面目な氣分であつた。眞劍な生活であつた。君は別にスキーの術を練習したのではなかつた。何米突飛んでやらうと云ふ野心を抱くヂャンプはしなかつた。美しいスプールを誇かうと、スウ井ングを練習する樣子もなかつた。唯スキーを穿いて山に入る事それ自身が君の全生命であつて、唯靜かに山を樂み、雪を悅び、自然の懷ろの中に在る事が至上の喜悅であり滿足であり、そして總べての生活であつた。哲學者が「人生とは何ぞや」の問題を思索せねば死きて居られぬが如く、眞の學者が眞理の探究に寢食を忘れねば死よりも苦しいが如く、君には山に入りスキーを穿く事なしでは到底一日も生きては居られなかつたのである。君の生活の全部が山の生活であつた。例へば君の部屋は、爐に信州の山人が作つた自在を釣り、犬の皮を敷いて山刀を壁にかけロープやストックや、ルユックザック等山行の道具一切が部屋の周圍を飾つて居て、主人公の君は何時も爐を前に按坐をかいて居る樣子は、どう見ても山人の住居とよりは思へなかつた。其の生活は全く山中の小屋に於けるそれであつた。だから何時とはなしに君の事を「御小屋」と呼ぶ樣になつて居た。君の全生活は山の生活であつた。君の思想は總べて山に關係があつた。君が私等の家へ遊びに來る時は何時もカフエパウリスターで乾葡萄の入つた味附パンを持つて來て呉れた。之は山へ入る時美味くて凍結せず、適當した食物だつたから、平常に於ても氣に入つて居たのであらう。君が常に飲んだのは紅茶で之も山で適した飲料なのであらう。兎に角此んな些細な事にまで、山と云ふ物が君の生活を支配して居た。

君の好んで讀んだ書物は何か、私は知らない。だが社會

主義や共産主義には現代の青年同様に深い理解と同情とを持つて居た。しかし君の性質は寧ろ虚無主義に共鳴し、老子の思想に一致する處が多かつた樣に思ふ。君はニーチエの物、特にツアラツストラを時々讀んで居るのを見たことがあるが之はニーチエがアルプスを眺めて讃嘆措く處を知らなかつたのに依る處が多いのであらう。アルプスやヒマラヤの良い寫眞版を好んで眺めて居る事が屢々あつた。繪畫はどんな傾向のものが好きだつたか、殘念ながら私は知らない。だが想像するに難くはない。セガンチニの物などは確に好きだつたに違ない。

札幌の生活は、君の個性の完全な表現であつて、その生活が君の人格の完成を助長した事は疑もない事實である。札幌の生活は君の一生中で最意義ある生活であつたに違ない。そして此の生活に間接直接私等が關係して居たのだ。君の人格が其の個性の束縛されない自由な進展によつて發達した事は、君自身の努力に依つた事は勿論であるが、又一面君の周圍を取り圍んで居た私等にも無關係だとは云はれない。そして君の人格が自然特に山の精神と共に合致する事に依つて完全の域に達し、人生の目的を發見してその生を終つたと見るならば、君を其處まで助け押し進ましたと私等が無關心な顏はして居られない。

一面から云へば君の死は人生の目的を達したもので無意義ではなからう。しかし死ぬ事は何と理由づけ樣と、物淋しい厭な事だ。特に親しかつた人の死は思ふだに物憂い。板倉君の死に對して私は氣が滅入つて仕方がない、その氣分を打ち破る爲に「君を殺した者は私である」と懺悔さして貰ひ度い。

板倉君を殺した者は……私だ。

寫眞說明

一、ムイネシリ頂上に於ける板倉君。

二、立山頂上より見たる室堂附近一帶の高原。
一月十五日午後二時半頃×の附近を左へ眺めたる時突風の强襲を受く。

三、松尾峠頂上より見たる天狗平の森林。
十六日×の近邊なる山稜に出づ。

四、松尾峠頂上より見たる大日早乙女の連山。
十六日午後四時半頃漸やくこの近邊に至る。板倉君は『前の人のスプールが見えない』といひ始めたる地點なり。

私が板倉君から享けたものは

大島亮吉

私が板倉君の山友達の一人となつて、一緒に山へ登りはじめ、漸くお互ひをほんとに知ることが出來る樣な程度までになつたのは、極く最近のことで、其處には板倉君なる人を眞實知るためには極めて僅かな時の經過しかなかつたのです。ですから其點に於て、私は自らが決して眞に板倉君の有つて居られたものを摑んではゐないことを、よく認めるものです。然しそれにも拘はらず、今私の心は、あの板倉君の死に對して、その根底から强くゆり動かされて、其處に徒らに感激し、昂奮し、追想すべきいろ〳〵の想ひが餘りに多く存するのです。此の際何と言ふべきか私には解りません。私自身として決定的に板倉君のことに就て何かを書くには、今姑くの凝視と熟慮とを要するのですが、長谷川君の餘儀ないお言葉に依る、この何等統一のない、ほんとにこれこそくだらない感想の一片が、板倉君を永久に記念すべく、特に撰ばれたこの貴重な紙上に載せらるべき何物も有たないことを最初に固くお斷り致します。

私は先づこゝに板倉君が平常から山に對して抱いて居られた心持とか、或ひは登山精神とかの名で呼ばるべきものに對して、私の僅かに享けることの出來た印象、それに依つて私の與へられた啓示などを、たゞ所感として亂雜乍ら書きつゞつて見ようと思ひます。

『板倉君の抱いた居られた山に對する心持、或ひは登山精神』——と言ふものに就て、それを文字の上で知ろうとするならば、この追悼號をお讀みになるお方は、もう一度、「山とスキー」の第三、四號をとりだして、そこに營て板倉君自身の發表なされた「登山法についての希望」なる一文をよくお讀み返へしになつて下さい。それは板倉君によつては、單なる感想の一つを文章としたものであつたかも知れ

ません。然し、今となつてはより深く感ぜられますが、私はその僅か一頁ほどに過ぎない短かな文章のなかに、ずつと後になつて知ることの出來た板倉君のあの山へ對して抱いてゐた、深い、靜的な、冥想的な、形而上的な、言はゞ板倉君自身その文の中で言つた言葉通りの東洋的な靜觀的な登山精神と、それから、一方に於けてそれと全く異なつた境地に置かるべき、大膽な、敢爲な、唯思ふ一つの單純な、而も太くて深い線上を側眼もふらずに歩いて行くその强烈な潑溂たる登山精神とのある發現、その片影を見出すのです。まこと板倉君の有つてゐたその登山精神は、文字としてはたゞこの一文のなかにのみ見出さるゝ樣に思へます。この當時の私は登山に對しては一時深い迷妄に陷つた嘗でした。私が事實上この一文に依つて當時啓發せられ、心秘かに指導せられて來たことは多大です。それから後に槇さんと板倉君とがいり交つて私を影響しました。槇さんは內的に深く、板倉君は外部的に私の啓示者でした。こんな個人的なつまらないことを書くのではありませんでしたでは、板倉君は一体その一文のなかで何を私——或ひは私以外の多くの山へ登る人々に示して呉れたのでせうか。それは勿論讀めばわかることですが、こゝにもう一度私が簡單に申しますと、即ちそれは「靜的と動的の山の味ひ方」に就てゞ、靜的な山の味ひ方の割合に比して、まだ幼稚な動的の登山に對する根本的な指導、發達のために、鋭い暗示と深い啓示とを與へて、それに對する板倉君自身の深い思索の痕を示してゐるのでした。けれども板倉君は、あの直情な性質としては、それ等のことを盛るに極めて簡潔直截な文章を以てしたので、却つて私はその發表せられた當時まだ板倉君とは面識のある程度しか知らなかつたので、それ程に深く印銘せらるゝ所がなかつたゞけです。そしてその後に次第に板倉君と接近して來るに及んで、益々深く感じて來たのでした。

板倉君が言つた靜的と動的の登山法——即ち言ひかへれば、山の味ひ方に於て、板倉君自身がある深いものを有つてゐたことは事實です。例へば、山上の美しい花の草原にたゞひとりで仰向けに寢轉び乍ら、何時間でも、青空や雲や靜かに聳ゐてゐる山の姿を凝つて默つて眺め喜んでゐる時と、たゞ一途頂に達するために何等名譽もなく功名もなく、峻しい氷と岩との上に全身のありとあらゆる筋肉を緊張させ燃燒させてゐるやうな時との二つを板倉君は愛してゐたのです。然し敢えてこのやうな時を愛し求めることは板倉君のみに限られたことではなく、此頃夏のみならず、冬でも春でも秋でも何時でも山へ登ろうとする人々は、勿論その範圍のみの人々に限られてはゐませんけれど皆この兩方面を對照させることを好んでゐるのでせうが、たゞ板

倉君に於ては、その程度が極めて熱烈で、眞摯で、深かつただけです。

靜的な山の味ひ方　それに就て私は板倉君に就て書くべき何物も有たないのです。何故ならば、それはたゞその人自身のみが、文字として發表し、言葉として表し得るものであるからです。即ち靜的な山の味ひ方とは、事實私等が山に居乍ら、山々が私等の肉体的な視野よりかくれて、それが私等の心野のうちに聳ゐ輝く時、——言ひかへますと心だけが山を歩いてゐるとき、即ち前に書いたやうに、山上の花の草原に身体だけが寢轉んでゐる時が主なのですから、その時の心境は他の者には充分に知ることの出來るわけはないのです。ですからそれは姑く置いて、動的の方面に於ける板倉君の過去を振り返つて見ますと、それに對する板倉君の熱烈さと眞摯な態度を幾分なりとも知ることが出來るやうに思へます。私は全体としては板倉君の過去の登山の經歷とかなんとか呼ぶものをよく知りませんが、例へば北アルプスの最高の山頂、槍をめざして、本邦で最初にスキー登山を企劃實行したのは板倉君でせう。而かも二回も試み、その一度は單身でした。成功したこか、しなかつたとかこ言ふ樣なことは全くこの場合問題外です。他に尙北海道では多くの記錄があることでせう。要するにこの方面では板倉君は實に純潔で熱心な實踐者でした。この動的な登山傾向を本邦に於て向上せしむるために、板倉君は熱烈な先驅者でした。そして終に信仰の刄を振りかざして人々の上に立ちたる實踐的殉教者の概を有するに到りました。こゝに到つて、板倉君の死が一層の力と强さとを加へて、板倉君を知る者の上に、板倉君自身を中心として丁度龕燈（がんどう）の僅かに限られた光圈のやうに、ある範圍を限つて深く感銘せらるゝ或る物が存在せるものゝ如くに思はれます。

こんなことを書いても何んにもなりませんが、私は漸く板倉君の山友達の一人となつて、これからは機會ある毎に一緒に山へ登れることをたのしみにしてゐたのでしたが、その漸く二回目の登山に加はろうとしてゐた時に板倉君のあの死です。私は先づ何よりも先に、板倉君の死に對して悲しいとか、悼むとかなどこ云ふ氣持よりも、自分は山登りでひとつの大きな損失をしたこ感じました。

ほんこに山へ登らうとするのには、大勢の仲間の團体で登れるものではありません。それかこ言つて何時でも何處へでも單獨で登山することも出來ないのです。ほんこに山へ登るには、ごく少數の相信じ、お互ひを認め合つた山友達は絶對必要で、また何ものにもかへ難いものと思ふのです。

私のくだらない所感はもうこの位でやめさせて下さい。

—（一九二二・三・二）—

板倉君の印象

中野誠一

寄宿舍の九號室。それは四年前には北大スキー部の集會所の樣にスキーの爲には無くてならない室だつた。夏でも五六臺のスキーがゴロゴロして居た。そして四十六室ある寄宿舍中では一番汚い室として自他共に許して居た。MやKや自分は其の室で共に寢起して話は夏でも冬でも山とスキーの事ばかりだつた。

秋季皇靈祭か神嘗祭の朝だつた。今は千葉縣で鷄屋をやつて居るK君が一人の小柄な色の黑い男を連れてやつて來た。茶目で英語の得意なK君が丁度前の日に講堂で講演をやつた米國人の老H博士の身振を眞似しながら少くとも自分には上手に聞える英語で其の小柄な男を紹介して吳れた其男が學習院から來た板倉君なのである。それから一所に植物園を散歩した。

言葉の上では初はお互に遠慮した。『板倉サン』『中野サン』で初まつた。それが板倉君になり出した。何時の間にか『倉』を云はなくなつた。そして『板サン』になり、終には『板公』で通した。對手は『中野君』から『ガンチャン』になり『エラ』に下落させて吳れた。

呼び掛けが下落するにつれて親交は上騰して行つた。

其の板公が今は逝つた。『オイ板公』と呼んでももう、『ナンダイ?』とあの返事をして吳れない。

落付いた男、無口な男。此が板サンの第一印象だつた。落付いた男の方は終にやつぱり落付いた男として印象を深めて行つた。然し無口ばかりでは無かつた。言葉數の少い中に全く思ひ浮ばないユーモアーが存して居る事を交るゝ共に見出した。

實際板サンは落付いて居た。一緒に山へ行つてもよく其を思はす處があつた。けれども私に特に板サンの落着いた男だと思はせたのは馬の話である。

日高浦河種馬所の「ギドラン四一。三」と云へば一寸馬の事を知つて居る北海道の人は誰でも思ひ起す程有名な悍馬だ。學校にも其の馬の子で「高山」と云ふ牡が居る。親讓りの氣性である。蹴る、立つ、かむ、被る、何でも馬の知つて居る藝當はそれが人に危害を加へる種類の事なら何でもやると云ふ、我々には手に負えない悍高の栗毛だ。

誰でも馬に乘つた事のある人は一寸生半分に馬に乘る樣になつた時分は、より悍高い奴に好んで乘りたがると云ふ生意氣が湧いて來る事を知つてるだらう。其生意氣は私にもある。そして好んで此馬に乘つたものだ。

或日私は板サンや外二三人と外乘した事があつた。生意氣にも私は此日例の「高山」に此桃尻をのせた。處が此日は特に「高山君」の虫の居處が惡かつたのか、常時よりも更に云ふ事を聞かない。荷馬車には尻を向ける。先頭に立たねば暴れる。先頭に立つと後から來る同僚を蹴りたがる。私は勒をしめるのに手に豆が出來た。云ふ事を聞かないから私は拍車を入れる、拍車を入れゝば益々猛り立つ。一里程乘る間に五六度街道の眞中でグル〳〵舞をやらされた。落ちなかつた丈が儲け物だつた。

目的地に付いて馬から下りた時一寸惡戲心が起つた。『板サン、歸りに高山に乘つて見ないか?』と云つた。實は板サンの高山に參らされる所が見度かつた譯である。

元來馬の心は乘手の心に一致する物だと云ふが夫は我々の樣な下手の部類にも通用する事である。馬上でいらいらすると馬まで性急になるし、悠然として居れば鞍下の動物も音無しい物だ。

歸路は板サンが高山に乘つた。板サンは乘馬の日が少い科だつたので高山に乘つたのは此日初手だつた。自分は意地惡く先頭の板サンの次に續いて其の暴れ振を拜見する氣になつて居た。けれども、結局私の目錄みは徒爾に過ぎなかつた。板サンは高山の上で悠然として居る、馬は乘手に同化して往路とは別な馬の樣になつて居た。そして正しく二分一の步度で學校へ歸つた。途中一度、「高山」の脚下で犬が吠へた時烈しく蹴上げた切だつた。『板公は馬鹿に落付いた男だなあ』此感は此外乘で益々深く自分に印象けた。

時々板サンは人を笑はせた。今はロンドンに居る北大スキー部の前部長N氏の新婚當時の事だ。貧民窟と口善惡ない連中が呼んで居た私達の住居に新婚のお二人が來られた事があつた。令夫人には初對面なので、常になくHもKも自分も眞面目になつて硬くお行儀よく坐つたものだ。丁度其處へ板サンが來た。N氏は私達にしたと同樣に、『此方が

板倉サン。此がフラウです』と相方の御紹介があつた。

『私が板倉です。有名な』此が初對面の板サンの言葉だ。

板サンの話は前から種々の連中から令夫人が聞いて居られたし、板サンも自分の事を夫人が聞いて居られる事も知つて居たから只の「板倉」では同姓異人だと思はれては困る心計か『有名な』と追加したのだつた。實際板サンは話に聞いてはどんな荒武者かと思はれる程の山男だが、會つて見ると小柄で此人が……と思ふ樣な大人しい品の良い人だつた

此挨拶で夫人は吹笑せられたし私達は『板サン、やつたな！』と思つた。それから面白く六人で話した。

板サンの室にはシャバンヌの畫が澤山あつた事を思ひ出す。その畫は、高い塔の上に一人の尼さんが下界を見て居ると云ふ樣な靜な落着いた畫だ。

板サンの一面にはゴッホの作品を好んだと云ふ所もあつたが、シャバンヌの樣な筆致も其の心持にピッタリ合つた所があつた。板サンは何處かで色々の畫を仕入れて來ては私によく見せて呉れた。

又音樂も好きだつた。そして何とかスキーと云ふ人の作が好きだつた樣に思ふ。多分ロシア人の作が好きだつたんじやないかと思ふ。板サンとは只一度U君の處へ、レコードを聞きに行つた事がある。其時はチャイコフスキーのものを板サンての注文で二三枚聞いた事を憶へて居る。

板サンはボートも好だつたらしい。Mと三人でMのバック臺を曳いた事がある、バックの曳き方は三人の中で一番上手だつた。

板サンの事を思ひ出せば極がない。

落付いた、大人しい、愉快な、そして多趣味な人だつた。

獨逸語の教師が、:Warum hast du mir gestorben !:と云ふ言葉は、一寸日本語では云ひ現せない惜しさとか悲しさと云ふ樣な意味を此のmirと云ふ字の中にふくんで居て此を何とか人稱代名詞と云ふんだと口の酸くなる程念を入れて教へて呉れた樣に思ふ。丁度此度のアクシデントには

:Hasu, warum hast du mir gestorben !:

と云んでは無いだらふか。

山と死と

加納一郎

イタクラカツノブクンタテヤマトサンチウ一七ヒトウシセラレシカナシミヲシラス——マキ。此の電報を受取つた私達の驚きは記すまでもない。丁度一七日だつた。塾の佐藤君が訪ねて來られて今度の白馬行や立山行のことに就て談じ會つてゐた。そしてその時立山の一行が消息不明だと新聞に傳へられてゐるのを見て笑つて居たのだつた。

それから數日を出でずして此の疑の餘地もない決定的な報知を手にしたんだつた。友の死と云ふ嘆き悲しみについで「どうして」「なぜ」と私達は考へた。そこには色々な想像が立てられた。板さん一人と云ふ事はあるまい。きつと皆がひどくやられた事だろふと思つたりした。實際板さん（私達は板倉君のことをいつもこう呼んでゐた。學習院で兄さんから引ついだワンデーと云ふ名は札幌ではあまり通つてゐなかつた。）は三人のうちではいちばんスキーに熟達してゐたそれ故或はコンディションが悪くなつたので活動しすぎたのぢやないだろふかとも思はれた。

富山から、東京から引つゞいて情報があつた。そして段々詳しい事が解つて來た。そのうちに須藤君が東京で槇さんや三田君に會つて親しく聽いて來たのを話してもらつたそしてそれが私達が今迄想像もつかなかつた有樣であるのに悲しみは更に新しくなつた。あゝ云ふ風な死の經過を板さんがするとは思ひもよらなかつた事であつた。

あの一行の立山のアクシデントに就て、同じ山に趣味を持つものとしての合理的な立場からの冷靜な批判は、恐らくスキーを用ふる冬季登山法の全てにわたつて論ぜられねばならない事である。而し今私の仕事はそれをする事では

ない。實際今度のアクシデントは今迄あつたものに比べて甚だ重要な意義を持つてゐる。それは常に合理的な登山法を以て十分の修練を積んでゐた人々であつたからして、全ての點に就て、その齎す所の教訓は甚だ意味の深いものである。無知な門外漢の淺薄な言葉に顧慮する要はない。吾々は今度の槇さんの責任ある報告によつて深い省察をなさねばならない。

今それよりも私は親しい山友達の記憶をよびさまし、そして山での死と云ふ事に就て考へて見たい。

例の貧民窟へは遠きをものともせずよくやつて來た。時にはこつそりと這入つて來て坐りこんでしばらくしてから「やあ、こんにちは」なんて驚ろかした。マントも取らずに一晩中談じて行つたこともある。そうかと、思ふとやつて來ても、そこいらにある本を勝手に讀んで殆んど話しもせずに歸つて行つたりした。學校へはあんまり出なかつたそれは講義がつまらなかつたので自然科學に興味を失したのではなかつた。兎も角、札幌へ來たのはスキーをやる爲めで講義や實驗は初めから第二義だつたんだ。それだから學校の爲には必要なる最小の努力しか拂はなかつた。而し必要なだけの事に就ては忠實だつた。私もよく講義を休んだ方だが、板さんは時々この必要な最小努力のことを說いた。

夏も冬も相棒があつてもなくてもよく歩ゐた。而し學校を休んで歩いてばかりゐたのではない。よく本を讀んだいろいろの本を讀んでゐた。音樂にも繪畫にも深い趣味を持つてゐた。そしてそれ等の傾向は靜かなものを好んだ樣だつた。それはその性格から見て自然な事である。板さんは一言にして云へば靜かな人だつた。世俗に觸れることを避けてゐた。厭世的傾向を持つてゐたが悲觀論者ではなかつた。衒氣と云ふものを全く持ち合せてゐなかつた。靜かだと云つても、よく話した。而しわれを忘れてはしやぐ樣な事はちつともなかつた。例の心府を刺す皮肉と諧謔には誰も追從の出來ぬ眞實味があつた。いゝかげんな誤間化しをやることいつもバサリとやられた。思ひ切つて露骨な事を云つたがそれは人間が自己を被除しよふとする殼をつきやぶるものであつて、ちつとも嫌な氣がなかつた。惡意が含まれてなかつたからである。日常生活の些細な事に就て人が眼をとぢて看過しよふとする樣なとき、よくそれを打ちこわした。そしてそこに哄笑と氣輕さとを置換した。戯談を云つたが浮薄な感じは全くなかつた。

山へ行つても多くを語らなかつた。いゝ景色に遭遇しても自分にのみ與へられた景色でどもあるかの樣に嬉しがつて、をどり上る樣な事はしなかつた。じつと見つめて靜かに樂しむ方だつた。小舍へ泊つたりなどするときちつとも

働かないことがあつたけれどもそれは誰か他に働くものが澤山ゐるときであつた。いざとなれば、どんどんやつて行つた。山の準備なんか。他人をあてにする樣な事を云つてゐても、いつも眞劍になつてやつて行つた。默つて行ふと云ふ方だつた。

板さんが抱いてゐた山に對する氣分については此の雜誌にも自ら書いた事があるから、既に理解せられてゐるだろふ。彼は特に山に對してはテレチロジカルな思想を嫌つた。

私達の仲間でも前からアクシデントに就てはしばしば話し合つてゐた。誰かゞやられるかも知れないと云ふことはつきり意識してゐた。死と云ふことは誰にとつても、不斷の大きな問題ではあるが山へ這入るものにとつては、それは常に特種な陰影を以て表れるものである。吾々は山の危險に就ては一般の人の考へる樣な恐怖的な態度は持つてゐない。しかし山では吾々は到る所に死の谷の入口を見出す。板さんもよくそのことを云つてゐた。

草津から澁へ行く途中で凍死した山崎幸一君はよく無理をやつた。吾々はその度毎にそんな事をしては死ぬと云つてゐたので、君の死に遭つて吾々の言葉が裏書せられた樣で變な氣がした。それに引きかえて今度の板さんの死は、全く考へたこともない事であつた。勿論私は周到な準備と豐富な經驗は、登山の危險をより少くするものであるが、それが山での生命を全く保證してくれるものであるとは信じない。究極に於て死は不可抗である。これは山にだけ限つたことではないが。而しあれだけの經驗と技術と、準備とを持つてゐた板さんに、かくも早く死が臨まうとはどうして思はれよふ。

死を背後にして結び合つてゐる山仲間は、お互に信じ合ひ得ることより以上のものがあろふか。ノルマルな狀態に於ては誰でもそう大して異らない。ストラグルが增して來るときに、初めて各人の差異が表れて來る。そしてそれが究極には生命を支配する大きなファクターになるのではなかろふか。今度の板さんの死は、前からあつて、常には氣のつかない何かの原因が大きな影響を表してゐるのではないかと思はれる。

死ぬまであの長い時間の苦鬪のうちに一言も苦情を云はなかつた板さんを私達は心から敬慕する。

スキーランナーとして、又アルピニストとしての板さんに就ては今更記すまでもない。そして君の死が山岳界にとつて大いなる損失であることも知れ切つてゐる。

此の雜誌が出來るときにも板さんは非常に盡力してくれた。札幌にゐなくなつてからも雜誌の爲には何でもやつて呉れた。そしていつもどうかして長くつゞけて行きたいものだと心配してくれた。「山とスキー」が今日の有樣になつ

たのは板さんに負ふ所が非常に多い。それに學習院や慶應の連中と吾々とを接近さして呉れたのも板さんだ。槇さんと吾々が親しい間柄になつたのも板さんを介してだつた。

特に私自身は全ての方面に於て板さんに啓發せられる所が多かつた樣な氣がするので、君の死は私には大きな影響を與へた、私にとつてば君の死は悲しいものに違いなつかた、然し板さん自身の爲には、或はあゝなつた方が幸福ではなかつたろふか。君の一生涯を思ふときそれは極めて淨らかなものであつた樣に考へられる。

板さんが死んで私は淋しい。それは一人の友達がなくなつた淋しさではない。何だか大きな山が消えてなくなつた樣な氣がする。

板さんを記念する誌面をとりとめもない自分の筆で汚す事を恥づる。

—一九三・四・二〇・京にて—

故板倉勝宣君の山に關する文獻

一、春の上河内へ　山岳十四年　二號
一、手稻山に寢るの記　アルペンツアイトウング
一、ムイネシリ岳登山記錄　同
一、春の槍から歸つて　山とスキー　No. 1.
一、登山法についての希望　山とスキー　No. 3.4
一、雪の信飛連山とスキー　山とスキー　No. 10.
一、山とスキー圈谷……等

編輯の後に

板倉君の追悼號が我々の話題に上つたのは君の追悼會が札幌で行はれた一月下旬頃であつたが實際それに着手したのはそれから一月を經た二月下旬であつたらうその頃の豫定では四月中旬に出來上がればよいと思つたがそれが引延して五月になつた。責任は全部私にある。

履歷としては唯登山履歷のみを掲載した。こゝに掲げたものは記錄にあるもの、記憶に殘つたものを綜合したのでこの外にも多くの山岳に足を入れた事と思はれる。

山に關する文獻中「北海道の冬期登山の道」は板倉君の逝去後見出された未發表のものであるから何かの機會に發表しやうと思ふ。

本號には槇有恒氏が立山に於ける遭難記を寄稿せられた。槇氏は凍傷の爲に永く入院して居られ三月中旬漸く退院せられそれから引續き湯河原温泉に於て療養せられた。原稿は同温泉にて書かれたものである。

遭難の報は新聞雜誌に既に掲載されたが遭難者自らの筆になるものは恐らくこれが最初のであらう。詳細を極めたその記事を讀んで始めて眞相を知る事が出來た。療養中にも關はらず執筆せられた槇氏に感謝の意を表したい。なほ本號の發行につき伊集院、松方、大島、三田、佐々木諸氏が有形無形の助力をして下すつた事を附記して置く。（長谷川敦）

會告

本紙第一號より第九號まで既に久しく殘本皆無の狀態に有之候が今般當會に於て定價又はそれ以上の價格にて御讓受致す可く候につき右御所持の方にして御不用の向有之候はゞ何卒御一報相煩はし度此段廣告仕候

定價　金參拾錢　本號に限り六拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。
*御送金はなるべく振替にてお願致します。
*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません
*前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。
*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十二年四月三十日印刷
大正十二年五月一日發行
（毎月一回十五日發行）
編輯印刷兼發行者　加納一郎
印刷所　札幌市北一條西二丁目　札幌印刷株式會社
發行所　札幌市北六條西七丁目　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番